

京都府埋蔵文化財情報

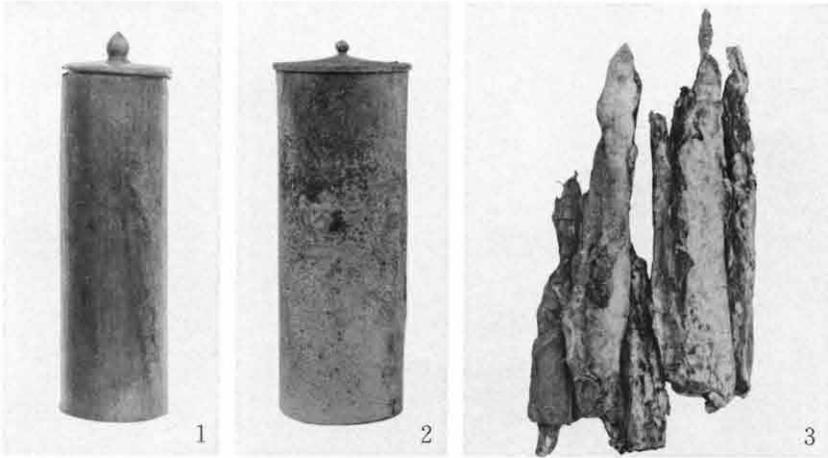
第 8 号

昭和58年度発掘調査予定の遺跡	杉原 和雄	1
昭和57年度京都府下埋蔵文化財の調査	田中 彰	5
福知山市大道寺経塚出土紙本経の保存修理とその問題点	難波田 徹	17
古代エジプト遺跡を訪ねて (5)	小山 雅人	21
—昭和57年度発掘調査略報—		26
20. 青野遺跡第7次	23. 千代川遺跡第3次	
21. 城ノ尾城館跡	24. 長岡京跡左京第98次	
22. 山田館跡		
府下遺跡紹介 12. 大官売神社遺跡	13. 丹後国分寺跡	35
長岡京跡調査だより		40
財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター 組織および職員一覧		44
センターの動向		45
受贈図書一覧		46

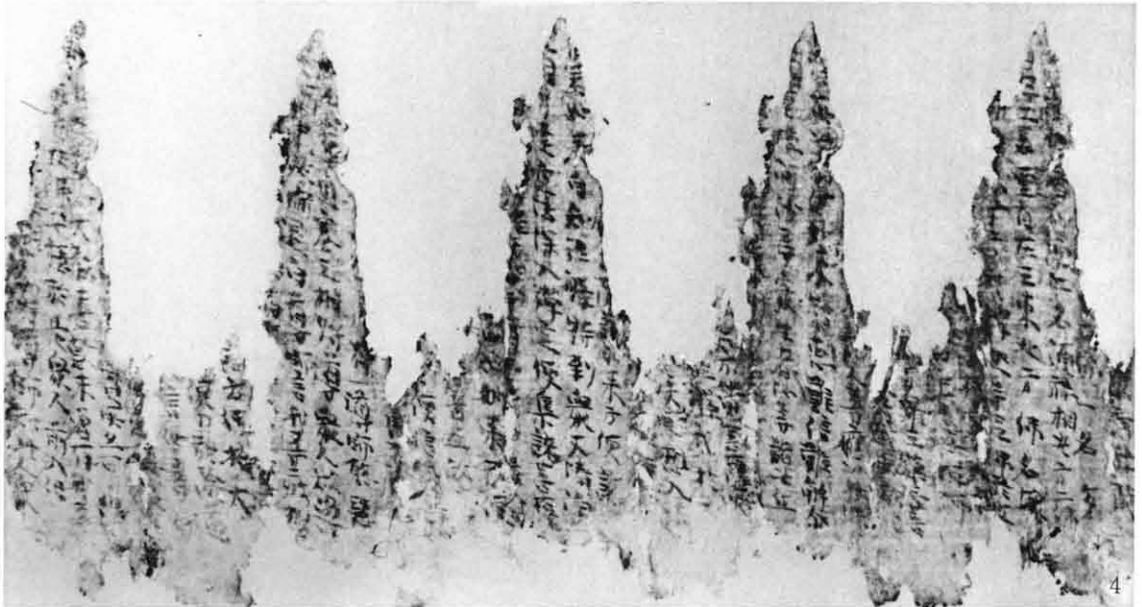
1983年6月

財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター

大道寺經塚出土紙本經



1. 竹製經筒
2. 銅製經筒
3. 經卷 (保存修理前)
4. 妙法蓮華經卷第3 (保存修理後)
5. 阿彌陀經 (保存修理後)



昭和58年度発掘調査予定の遺跡

杉原和雄

財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センターは、発足後3年目を迎え、事業量も、初年度21件、昨年度27件、今年度30件（予定）と増加する傾向にある。これらの事業を担当するため、今年度は調査課に2名を増員し、事務局長（常務理事）以下、総務課5名、調査課29名、計35名の職員が従事することとなった。

昭和58年度に当調査研究センターが発掘調査を実施中、および予定しているものは別表のとおり30件あり、他に5件の遺物整理を行うものがある。なお、当初予定に入っていないが、緊急に依頼をうけることも予想されるので、最終的な調査件数は予定以上の件数になるものと考えられる。

別表の発掘調査予定30件のうち、継続するものは、1中山城跡、7青野遺跡など13件、事業は継続するが対象となる遺跡が異なるものは、3ケシケ谷城館跡、26西出合遺跡など5件、新規のものは、2田辺城跡、10蒲生遺跡など10件である。地域的には、中丹地域、南丹地域に多く、しかもこれらのものは調査対象面積の広いことが特色である。遺跡の年代は、複合するものが多いが、弥生時代10件、古墳時代8件、他は奈良時代以降のものである。近年、中近世の城館跡の調査例が全国的に増えているが、当調査研究センターでも5件を数える。また原因工事別にみると、道路建設に係るものが依然として多く、15件、校舎・官庁舎建設によるもの11件、宅地造成によるもの2件、その他2件となっている。

中山城跡は、前年度に掘り切り部および墓地を検出しているが、今年度は郭の一部と小マウンドを有する古墓の調査が予定されている。

ケシケ谷城館跡では、試掘調査の結果、中世の遺物のほか、弥生土器が出土しているので、当該時期の住居跡が検出される可能性が強い。

青野西遺跡は、古式土師器を伴う住居跡がトレンチ調査によって確認されているので、今年度は約33,000m²にわたり全面調査を行う。

蒲生遺跡は広大な台地にひろがる遺跡で、弥生時代以降の遺構の検出が予想され、今回初めて発掘調査を行う。近辺には京都大学が調査した弥生時代～中世に至る遺物が出土した美月遺跡が所在する。

千代川遺跡は、きわめて広域な範囲に及ぶものであり、4か所で調査を行う。弥生時代から中世に至る集落跡の検出が予想される。

北金岐遺跡は、弥生時代後期の溝跡が一部検出されているので、約6,000m²にわたり

番号	名 称	種 別 員 数	所 在 地	原因工事	調査対 象面積	調査予 定時期	備 考
1	中山城跡	城跡	舞鶴市字中山小字一ノ丸	府道改良	1,000 m ²	6～8月	57年度から継続
2	田辺城跡	城跡	舞鶴市大字南田辺小字大内力下	府立学校校舎改築	800	7～8	
3	ケシケ谷城館跡	城跡	福知山市字大内小字ケシケ谷	近畿自動車道建設	1,200	5～6	
4	岩崎古墓	古墓	福知山市大字長田小字岩崎	〃	50	7	
5	岩崎古墳	古墳	福知山市大字長田小字岩崎	〃	100	7	
6	洞楽寺遺跡他	城跡	福知山市字大内小字坪田	〃	5,000	6～10	
7	青野遺跡	集落跡	綾部市青野町	府道改良	200	7	56年度から継続
8	青野西遺跡	集落跡	綾部市青野町西吉美前	由良川改修	3,000	4～7	57年度から継続
9	土師南遺跡	散布地	福知山字土師南	府立高校校舎改築	1,800	6～7	56年度から継続
10	蒲生遺跡	散布地	船井郡丹波町字豊田	〃	500	6～7	
11	千代川遺跡	集落跡	亀岡市千代川町 他	宅地造成	1,000	5～7	57年度から継続
12	千代川遺跡他	集落跡	亀岡市千代川町	府道改良	3,000	7～10	
13	千代川遺跡	集落跡	亀岡市大井町小金岐	府立学校校舎新築	4,500	6～8	
14	千代川遺跡	集落跡	亀岡市千代川町北ノ庄	国道9号バイパス建設	200	9	56年度に一部調査済
15	亀岡条里制跡	条里制跡	亀岡市大井町	〃	24,000	6～8	56年度から継続
16	北金岐遺跡	集落跡	亀岡市大井町	〃	6,000	5～8	57年度から継続
17	篠窯跡群	窯跡	亀岡市篠町	〃	30,000	8～59.3	56年度から継続
18	伏見城跡	城跡	京都市伏見区桃山町	府立学校校舎改築	100	7	56年度に一部調査済
19	長岡宮跡	宮殿跡	向日市上植野町南開	警察庁舎新築	100	6	
20	長岡京跡	都城跡	長岡京市今里	都市計画道路建設	600	7～8	56年度から継続
21	長岡京跡	都城跡	長岡京市・乙訓郡大山崎町	電話線敷設		4～59.3	57年度から継続 立会調査
22	長岡京跡雲ノ宮遺跡	集落跡	長岡京市	国道改良	700	6～8	56年度に一部調査済
23	隼上り古墳	古墳2	宇治市菟道隼上り	京滋バイパス建設	800	10～59.3	
24	隼上り遺跡	散布地	宇治市菟道隼上り	〃	10,000	10～59.3	
25	木津川河床遺跡	散布地	八幡市八幡小字源野・焼木	下水処理施設建設	400	5～6	57年度から継続
26	西出合遺跡他	散布地6	相楽郡精華町東畑 他	宅地造成	2,600	4～12	57年度から継続
27	長岡京跡	都城跡	長岡京市下海印寺	府立高校建設	30,000	4～6	57年度から継続 試掘調査
28	上中遺跡	散布地	北桑田郡京北町大字弓削	府立高校校舎新築	750	7～8	
29	平安京跡	都城跡	京都市南区西九条	〃	1,000	7～8	
30	田辺城跡	城跡	舞鶴市大字円満寺小字八丁	庁舎建設	400	8～9	

表1 昭和58年度 発掘調査予定遺跡一覧表

番号	名称	種別 員数	所在地	原因工事	整理予定 期	備考
1	古殿遺跡	集落跡	中郡峰山町字古殿	府立高校校舎改築	4～12月	現地調査57年度
2	大内城跡	城跡	福知山市字大内	近畿自動車道建設	5～59.3	現地調査56・57年度
3	長岡京跡	都城跡	長岡京市今里	都市計画道路建設	4～10	現地調査56・57年度
4	篠窯跡群	窯跡	亀岡市篠町	国道9号バイパス建設	4～59.3	現地調査52～57年度
5	太田遺跡	集落跡	亀岡市禰田野町	〃	4～59.3	現地調査57年度

表2 昭和58年度 遺物整理予定遺跡一覧表

住居跡、溝跡の追求を行う。

篠窯跡は、昭和56年度からの継続事業であるが、本年度も田畑や山林の試掘を始め、数基の窯体の調査を行う。

長岡京跡の調査は、複数の機関が数多くの調査を実施しているが、これらの機関と密接な連絡をとりつつ5件の調査を実施する。

木津川河床遺跡は、前年度弥生時代から中世に至る遺物が出土している。これらの土器は殆ど磨耗していないので、付近に遺構が存在する可能性が考えられる。遺物包含層は地表下約2mに存するので、調査方法を検討して慎重に実施していきたい。

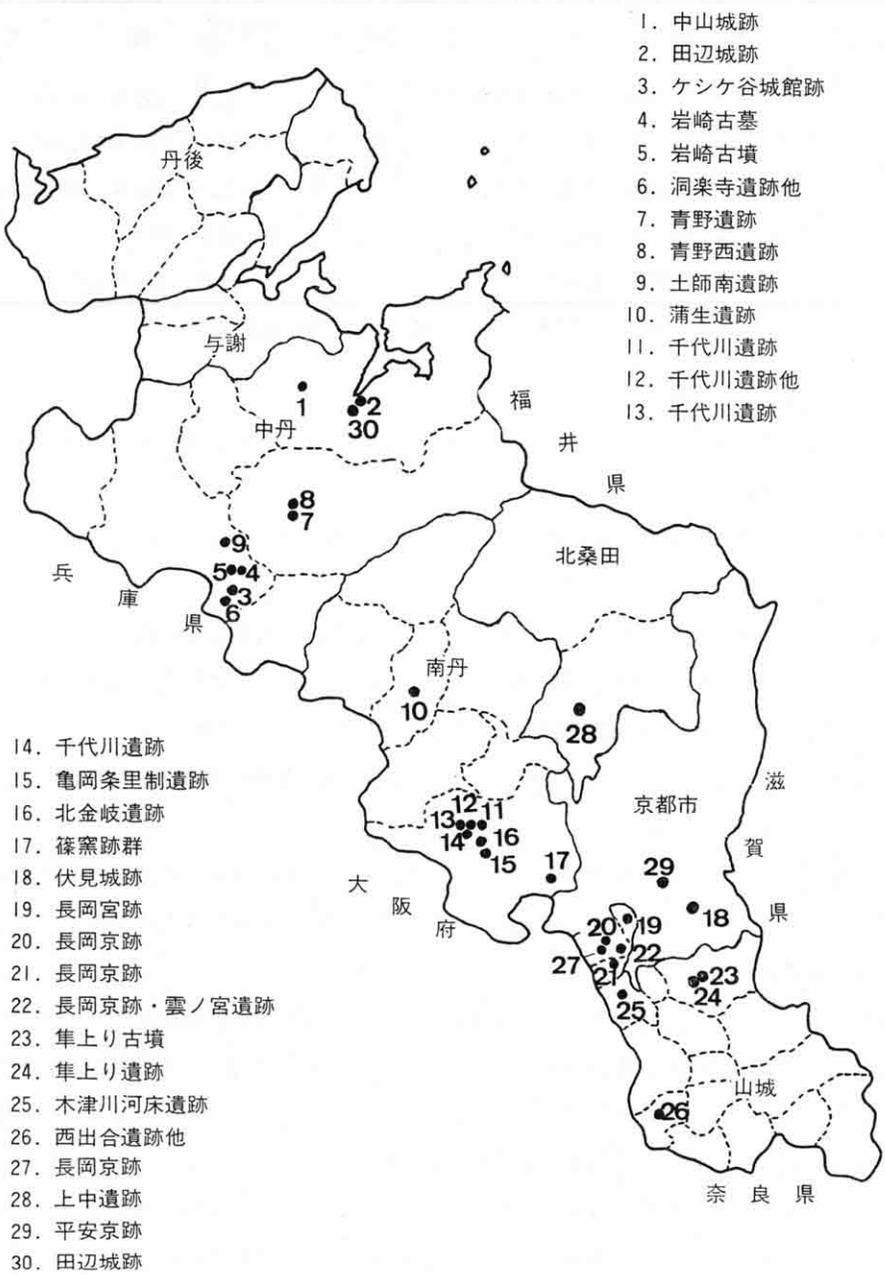
上中遺跡では従来から、弥生土器や石器片が採集され、北桑田高校に保管されている。今回、初めて発掘調査を行う。

田辺城跡は既に舞鶴市教育委員会により発掘調査が行われ、石垣の検出とともに多量の遺物が出土している。当センターが予定している2件は、いずれも外堀に関連するもので、石垣等の確認を行う。

遺物整理は5件を予定し、そのうち大内城跡については本報告書を作成する。古殿および太田遺跡は大量の土器や木器が出土しており、いずれも当該地域の土器編年の基準資料となるものである。また太田では多彩な石器があり、注目されている。長岡京跡の遺物には、長岡京期のものの他、人物埴輪を含む埴輪片が多数あり、乙訓地域の古墳文化を考えると好資料となるものである。篠窯跡群では、すでに16基の窯体の調査を行っているが、出土品を順次整理し、土器編年の作業を進めていく予定である。

昭和58年度も、現地の発掘調査、室内の整理作業とともに普及啓発事業としての研修会（8回予定）や講演会等を開催するとともに、本誌の刊行（4回予定）を行う。府下関係機関の御協力をえて、成果の多い1年となるよう職員一同努力を重ねていきたいと考えている。

（杉原和雄＝当センター調査課 課長補佐）



昭和58年度 発掘調査予定遺跡位置図

昭和57年度京都府下埋蔵文化財の調査

田 中 彰

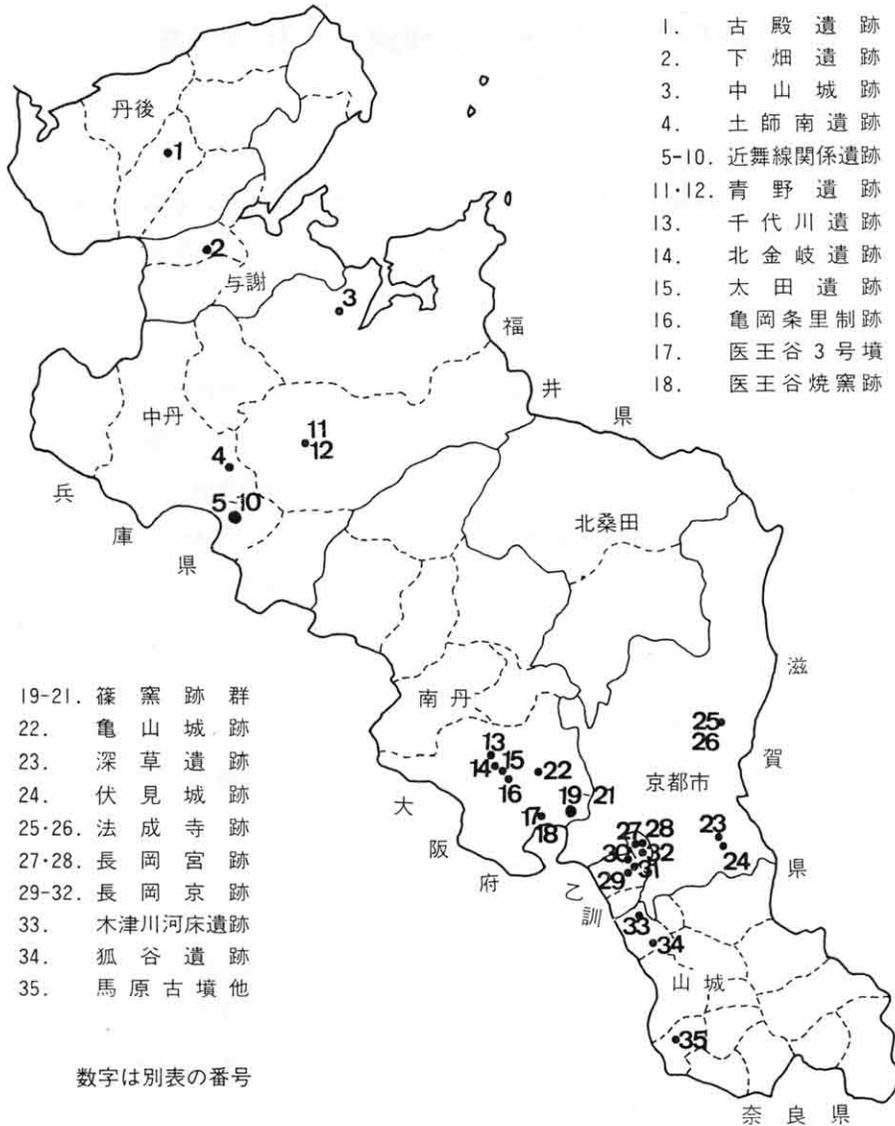
京都府下における埋蔵文化財の発掘調査は年ごとに増加しており、京都府教育委員会が集計した昭和57年の発掘調査届出書及び通知書の件数は、昨年とほぼ同様の194件となっている。^(注1)

当調査研究センターが行う調査は、「国・公社・公団及び京都府が行う開発工事に伴う遺跡の発掘調査」であるが、発足2年目の昭和57年度には、各関係機関から27件の調査委託があった。^(注2)1件であっても複数の遺跡が対象となる場合があるので、実際に発掘調査を実施した遺跡は別表のとおり35件に及んでいる。京都府下では当調査研究センターの他に、京都府教育委員会・各市町村教育委員会・財団法人京都市埋蔵文化財研究所・財団法人長岡京市埋蔵文化財センター（昭和57年7月1日発足）・平安博物館・京都大学埋蔵文化財研究センター・京都大学構内遺跡調査会・同志社大学校地学術調査委員会等が各地でそれぞれ発掘調査を実施している。

本稿では、まず、当調査研究センターが実施した調査の概要について述べ、つぎに、各市町教育委員会等が実施した調査のうち主なものについて簡単に述べることとする。

別表の1. ^{ふるどの}古殿遺跡は、竹野川の支流である小西川の沖積平野を望む丘陵端部に位置し、昭和52年度の調査で弥生時代後期から鎌倉時代まで断続的に営まれた集落遺跡であることが明らかにされ、多種・多量の木製品が出土している。今回の府立峰山高等学校校舎増改築に伴う調査でも、竪穴式住居跡3基・溝数条・暗渠排水施設・堰等の弥生時代後期～古墳時代前期の遺構を検出した。遺物も大量に出土しており、注目すべきものとして注口土器・土製勾玉・鐸形土製品・碧玉製管玉（未製品）がある。また、木製四脚机（案）・盤・各種建築用材等の木製品も大量に出土した。注口土器は古墳時代前期のもので、京都府では初めての出土である。木製四脚机（案）は祭祀に伴う供献用の台と考えられるが、長辺73cm・短辺42cm・厚さ3.5cmの杉の一枚板の四隅に長さ30cm前後のやや外側に開く脚をはめこんでいる。四脚をもつ大型の机としては、わが国最古の出土例である。^(注3・4)

2. ^{しもはた}下畑遺跡は、野田川流域の「^{かやだに}加悦谷」と呼ばれる遺跡が濃密に分布する地域に位置する。府立加悦谷高等学校の校舎増改築に伴う調査で、昨年度の立会調査では顕著な遺構は確認しなかったが、今回の調査では平安時代末期の井戸を検出した。井戸は一辺約1.2mの方形を呈する木枠組みのもので、井戸内及び井戸掘形内からは、黒色土器・土師器の他、



昭和57年度 発掘調査実施遺跡位置図

漆器・下駄・しゃもじ状木製品・はし・曲物底等の木製品が出土した。調査結果から周辺に集落跡が存在することはほぼ確実であろう。
(注5)

3. 中山城跡は、若狭湾に注ぐ由良川の河口から約 5 km 遡った右岸に位置する。城の主要部は標高約 60 m、南北約 300 m・東西約 150 m の舌状に延びた丘陵上にあり、東南方向約 1.8 km の建部山山頂に所在する建部山城の支城と考えられる。道路拡幅工事に伴い城跡の最南部の地区を調査し、火葬墓・堀切りを検出したが、出土遺物が少量で時期等は明らかでない。昭和58年度も継続して調査を実施する予定であるが、調査予定地には

昭和57年度京都府下埋蔵文化財の調査

番号	遺跡名称	種別	所在地	担当者	調査期間	概要
1	古殿遺跡	集落跡	中郡峰山町字古殿	戸原 和人 藤原 敏晃	57. 7. 1～ 10. 30	竪穴式住居跡 3 注口土器・案出土
2	下畑遺跡	集落跡	与謝郡野田川町字三河内	竹原 一彦	57. 7. 22～ 10. 1	平安末の井戸
3	中山城跡	城跡	舞鶴市字中山	竹原 一彦 藤原 敏晃	57. 12. 8～ 58. 3. 31	火葬墓 6, 堀切り
4	土師南遺跡	散布地	福知山市字土師	竹原 一彦	57. 7. 1～ 7. 9	顕著な遺構なし (注6)
5	大内城跡墳墓	墳墓	福知山市字大内	伊野 近富 岩松 保敏 藤原 敏晃	57. 4. 2～ 7. 28	中世墳墓群 蔵骨器 5
6	後正寺古墓 小屋ヶ谷古墳	墳墓	〃	岩松 保敏 伊野 近富	57. 6. 26～ 12. 8	平安～江戸の墳墓 円墳, 横穴式石室
7	洞楽寺古墳	古墳	〃	伊野 近富 岩松 保敏	57. 9. 6～ 11. 30	円墳, 横穴式石室 中世墓 3
8	山田館跡	墳墓	〃	岩松 保敏 伊野 近富	57. 12. 6～ 58. 3. 31	中世墳墓群 蔵骨器 7
9	城ノ尾城館跡	館跡	福知山市字宮	小山 雅人 伊野 近富	57. 12. 22～ 58. 3. 31	掘立柱建物跡 2 竪穴式住居跡 1
10	ケシヶ谷遺跡	集落跡	〃	伊野 近富	58. 3. 4～ 3. 15	竪穴式住居跡 1
11	青野遺跡 7次	集落跡	綾部市青野町西吉美前	小山 雅人	57. 7. 12～ 11. 18	竪穴式住居跡 1
12	青野遺跡 8次	集落跡	〃	小山 雅人	57. 7. 12～ 10. 20	竪穴式住居跡 5 由良川旧河道
13	千代川遺跡 第3次	集落跡	亀岡市千代川町 大井町	岡崎 研一	57. 11. 17～ 58. 3. 31	竪穴式住居跡 2 環濠
14	北金岐遺跡	集落跡	亀岡市大井町	田代 弘	58. 1. 19～ 3. 31	溝, ピット
15	太田遺跡	集落跡	亀岡市薺田野町	村尾 政人 岡崎 研一 田代 弘	57. 5. 6～ 10. 30	土塚墓 40 溝 9 (環濠)
16	亀岡条里制跡	条里跡	亀岡市大井町他	村尾 政人 岡崎 研一 田代 弘	57. 5. 6～ 12. 10	現存条里以外に顕 著なものなし
17	医王谷 3号墳	古墳	亀岡市下矢田町	引原 茂治	57. 9. 17～ 58. 2. 12	円墳, 横穴式石室
18	医王谷焼窯跡	窯跡	〃	引原 茂治	58. 2. 14～ 3. 31	連房式登窯 1
19	篠・西長尾奥 第1窯跡	窯跡	亀岡市篠町	引原 茂治 土橋 誠	57. 5. 10～ 6. 22	焼土・灰原確認
20	篠・黒岩窯状 遺構	窯跡	〃	引原 茂治 土橋 誠	57. 6. 23～ 8. 31	平窯? 1
21	篠・石原畑 窯跡群	窯跡	〃	石井 清司	57. 5. 17～ 12. 10	登窯 3
22	亀山城跡	城跡	亀岡市横町	土橋 誠 岡崎 研一	57. 10. 18～ 11. 6	外堀の一部検出
23	深草遺跡	集落跡	京都市伏見区	竹井 治雄 黒坪 一樹	57. 10. 5～ 10. 30	顕著な遺構なし (注29・30)
24	伏見城跡	城跡	〃	長谷川 達 久保田 健士	58. 1. 13～ 2. 28	石組み溝, 金箔瓦
25	法成寺跡 3次	寺院跡	京都市上京区	小池 寛	57. 11. 5～ 12. 9	近世の井戸
26	法成寺跡 4次	寺院跡	〃	小池 寛	58. 3. 10～ 3. 19	顕著な遺構なし
27	長岡宮跡 第123次	宮殿跡	向日市寺戸町	竹井 治雄	57. 7. 10～ 9. 15	掘立柱建物跡 1
28	長岡宮跡 第125次	宮殿跡	向日市森本町	久保田 健士	57. 7. 29～ 9. 21	溝 3 木簡・銅銭
29	長岡京跡右京 第105次	都城跡	長岡京市今里西ノ口・ 舞塚	山口 博	57. 7. 12～ 58. 1. 26	掘立柱建物跡 2 今里舞塚古墳
30	長岡京跡右京 第107次	都城跡	長岡京市井ノ内西ノ 口	山下 正	57. 7. 19～ 10. 2	古墳時代土塚墓 2 中世柱穴・溝等

番号	遺跡名称	種別	所在地	担当者	調査期間	概要
31	長岡京跡右京 第110次	都城跡	長岡京市今里4丁目	黒坪 一樹	57. 8. 4~ 9. 16	三条条間小路側溝
32	長岡京跡左京 第98次	都城跡	向日市上植野町	山下 正	57. 12. 20~ 58. 3. 14	掘立柱建物跡2
33	木津川河床 遺跡	散布地	八幡市八幡小字源野・ 焼木	長谷川 達	57. 9. 3~ 10. 4	弥生末~古墳前期 の土器多数出土
34	狐谷遺跡	散布地	八幡市美濃山狐谷	久保田健士	57. 5. 14~ 7. 17	土塚・溝
35	馬原古墳他	古墳他	相楽郡精華町東畑	石尾 政信 黒坪 一樹	57. 10. 5~ 58. 3. 31	顕著な遺構なし

昭和57年度 発掘調査実施遺跡一覧表

一辺 1.5~2m の方形土饅頭の墓が数基一直線上に並んでいる。

5~10の6件は、昭和54年度から実施されている近畿自動車道舞鶴線建設に伴う調査である。5. **大内城跡墳墓**は、大内城跡（平安~室町時代）の東北隅に位置する鎌倉時代後期から南北朝時代にかけての墓である。墓域は東西 6.5m・南北 3m で、全体に円礫が約 20~40cm の厚さで敷かれ、東西 2区画に合計 5基の蔵骨器が埋納されていた。また、墓域全体を三方向から塞ぐ形で、幅約 2m の溝が廻っており、結局、東西 14m・南北 13m の範囲が当時の生活空間と切り離されていたことになる。蔵骨器は須恵器三耳壺・丹波系大甕・土師器鍋・丹波系壺など多彩であり、中には骨の他、鏡片・鉄刀・中国製褐釉壺・瀬戸灰釉小壺片等が納められていた。時期は約100年に及ぶことから、おおよそ4世代にわたる埋葬施設と考えられる。^(注7・8)

6. **後正寺古墓・小屋ヶ谷古墳**は大内城跡の南側丘陵尾根の先端部に位置する。平安~江戸時代の古墓群の下層で、両袖式の横穴式石室をもつ古墳を検出した。石室の天井石と側壁上部の石材は、既に失われていたが、遺物の残存状況は良好であった。古墳は径約 12m の円墳に復原でき、築造年代は6世紀後半と考えられるが、副葬品の出土状況から2~3回の追葬が行われたと思われる。^(注9・10・11) 7. **洞楽寺古墳**も小屋ヶ谷古墳と同時期の横穴式石室墳であるが、遺存状態は悪い。径 14~16m の円墳に復原できる。他に中世墓3基を検出した。^(注12・13) 8. **山田館跡**は、土塁状隆起が認められたので、当初、城館跡と推定し調査に入ったが、蔵骨器をもつ火葬墓7（土師器鍋6、瀬戸灰釉菊花文瓶子1）、丹波焼大甕の埋置1、集骨・集石遺構30以上等の中世墳墓群を検出した。建物跡や土塁・堀など、城館跡に関連する顕著な遺構や遺物はなかった。蔵骨器はほとんどのものが日常雑器を転用したものであって、同時期に造営された大内城跡墳墓の被葬者との階層差が窺える。^(注14) 9. **城ノ尾城館跡**でも、土塁状隆起・空堀が認められていたが、調査の結果、掘立柱建物跡2棟・平行ピット列等の鎌倉時代の遺構の他、古墳時代初頭の堅穴式住居跡1基を検出した。^(注15)

綾部市青野町一帯に広がる**青野遺跡**は、府下でも有数の複合集落遺跡として以前から広

く知られている。遺跡は、丹波高原に源を發し北流して来た由良川が、綾部市街地の北部で大きく西方に流路を変える地点の左岸自然堤防上に位置する。範囲は南北約 500 m・東西約 200 m の広がりをもつものと想定され、これまでに弥生時代中期から古墳時代後期にかけての住居跡群や、それらに伴う多数の溝・土坑状遺構等が検出されている。今回の第 7 次調査地は青野遺跡の北限にあたると考えられるが、7 世紀後半の竪穴式住居跡を 1 基^(注16・17)検出した。第 8 次調査は試掘調査であるが、弥生時代後期～古墳時代前期にかけての竪穴式住居跡を 5 基検出した。さらに、弥生時代～奈良時代末葉にわたる由良川の旧河道を發見したことは、注目に値する。このことにより旧来の青野遺跡は、当時由良川右岸に存在したことになり、周辺の各遺跡・古墳群との関係を再考する必要が生じた。また、今回の調査地も、由良川右岸の青野遺跡と区別するために、新たに「青野西遺跡」と呼ぶこと^(注18・19)になった。昭和58年度の本調査の結果が期待される。

13. ^{ちよかわ}千代川遺跡は、日吉ダム建設事業に伴う集団移転地の調査である。ベッド状遺構をもつ古墳時代前期の竪穴式住居跡 2 基と、それらを取り囲むような幅約 10 m・深さ約 1.5 m の環濠を長さ約 150 m にわたって検出した。検出した住居跡の西側には、さらに住居跡・倉庫跡等が存在すると予想^(注20)される。

15. 太田遺跡は、大堰川右岸の行者山から南東へ緩やかにのびる標高 100 m 程の丘陵の縁辺上に位置する。国道 9 号線バイパス建設工事に伴う亀岡盆地の条里跡を対象とした調査で新たに發見された遺跡である。今回の調査で、弥生時代前・中期の土坑約 40 基、溝 9 条を検出した。亀岡盆地で弥生時代前期にまで遡る遺構が検出されたのは、今回が初めてである。土坑は、円形・楕円形・長方形と様々な形態をとるが、骨片・木製櫛・石器などの出土遺物から墓と考えられる。溝のうち 2 条の円弧状を呈するものは、集落を取り囲む環濠と考えられ、その規模は外側の溝で東西の長径 160 m・南北の短径 120 m、内側の溝で長径 120 m・短径 90 m の東西に長い楕円形に復原できる。遺物は、土坑・溝・包含層から弥生時代前・中期の土器・石器等が多量に出土しており、その中に無文土器片も確認されている。また他に弥生時代後期の溝、古墳時代後期の土坑、平安時代のピット等も^(注21・22)検出している。

17. ^{いおうだに}医王谷 3 号墳は、亀岡市街地から西南約 1.5 km の龍ヶ尾山北東麓の西から東方向へのびる小尾根の端部に位置しており、墳丘西側では尾根を断ち切った状態が窺えた。古墳は直径約 11 m・高さ約 3 m の円墳であり、幅約 1.5～3.5 m の周溝が墳丘周囲をほぼ一周する。内部主体は、南東側に羨道部が開口する両袖式の横穴式石室で、玄室部は長さ約 2.6 m・幅約 1.6 m、羨道部は長さ約 1.1 m・幅約 0.8 m を測る。石室内からは、台

付有蓋壺を始めとして多数の須恵器・鉄器・装身具等が出土した。中でも、鉄製鋤先・のみ・刀子などのミニチュアがセットで出土したことが注目される。これらの遺物の時期は須恵器からみて、6世紀中葉頃のもの、それよりやや新しくなるものがある。また、墳丘南東側の羨道部閉塞石の前とみられる場所から墓前祭祀の供献とみられる二組の須恵器群が出土している。これらも、石室内遺物と同じく二時期のものである。^(注23)

18. 医王谷焼窯跡は、医王谷3号墳と同じく国道9号線バイパス建設に伴い調査を実施した。医王谷焼とは、寛延2(1749)年松平信岑が丹波篠山から丹波亀山へ転封された際、丹波焼の工人を連れてきて藩窯として開業したと伝えられ、明治になり廃窯となるが、明治12年頃に民窯の「亀岡焼」として再興され、約3年間操業したと言われている。今回検出した窯体は、わずかに燃烧室が残っていたのみであったが、京焼の窯と似ており連房式登窯と推定できる。遺物は、藩窯時代のものと民窯時代のもの両方が出土している。

19～21は、国道9号線バイパス建設工事に伴う篠窯跡群を対象とする発掘調査である。篠窯跡群の調査は昭和52年度の前山1号窯より開始され、昭和56年度までに窯体構造の明らかなものだけでも12基が確認されている。登窯が6基と、緑釉陶器が出土した黒岩1号窯、前山2・3号窯等の小型三角窯が5基と、もう1基は、56年度に調査した平面楕円形でロストル(火格子)型式による二重床面という特異な窯体構造が注目された西長尾5号窯である。今回調査を実施した19. ^{にしなが おおく}西長尾奥第1窯跡では、窯体は検出できなかったが、窯体の痕跡と考えられる焼土と灰原を確認した。出土遺物は、すべて須恵器で8世紀後半のものである。^(注24) 20. ^{くろいわ}黒岩窯遺構は、昭和54・55年度に調査された小柳窯跡群東側の尾根上緩斜面に位置する。全長約2.8m・幅約1.3m、床面傾斜角度約13度の砲弾形の平面形をもつ平窯とみられるが、残存状況は悪く南側煙道部および西側窯壁はほとんど残っていない。また灰原・遺物が全くなく、この窯の性格・時期等については不明である。^(注25) 21. ^{いしほらばた}石原畑窯跡群は篠窯跡群中最東端に位置する。今回の調査で半地下式登窯3基を検出した。1号窯跡は長さ6.0m・幅1.3m、傾斜角度30度を測る。焚口部および煙導部の一部は後世の削平を受け、遺存状態は悪い。側壁の断ち割り観察より一部に4回以上の補修作業が認められた。2号窯跡は1号窯跡の北5mに隣接し、長さ9.5m・幅1.3mと篠窯跡群中最大規模を有する。傾斜角度は30度である。3号窯跡は、1・2号窯跡の東の丘陵上部に築造されており、長さ4.0m・幅1.3m、傾斜角度30度を測る。窯体内の遺物遺存状態は良好で、杯・皿・蓋など30点以上が転落した状態で出土した。出土遺物から1・2号窯は9世紀後半、3号窯は8世紀後半に築造されたと考えられる。各窯跡出土遺物は、コンテナ500箱以上^(注26)のほり、今後の篠窯跡群出土土器の編年作業において良好な資料となる。

22. 亀山城跡の調査は、府立亀岡高等学校の校舎増改築に伴うものであったが、外堀の

^(注27・28)
一部を検出した。

24. 伏見城跡の調査は、府立桃山高等学校の校舎増改築工事に伴うものであるが、調査地は大名屋敷が存在していたと推定される地点にあたる。石組みの溝・素掘りの大溝・建物跡・井戸・土塚等の遺構を検出した。大名屋敷を区画していたと考えられる石組みの溝は3度作り直されており、また、土塚や素掘りの大溝には焼土が投棄されていた。これらの結果は、地震や関ヶ原の合戦で倒壊・焼亡しながらも、そのつど復旧された伏見城の歴史とよく一致するものである。遺物は土師皿や陶器類等の他、かなりの量の金箔瓦が出土^(注31・32)している。

長岡京跡に関しては、宮内で2件、右京で3件、左京で1件の調査を実施した。

27. 宮内第123次調査では、長岡京期の5間×2間の東西棟の掘立柱建物跡とその雨落溝を検出した。建物跡の柱間寸法は梁行・桁行とも2.7m(9尺)等間であり、柱穴の掘形は1.1m×0.8mを測る大きなものであった。官衙建物の1つと考えられる。^(注33・34)28. 宮内第125次調査では、北西から南東に流れる長岡京期の溝2条と長岡宮の東限を区画すると考えられる南北溝(東一坊大路側溝)を検出した。これらの3条の溝からは、土師器・須恵器とともに、「家人四人」と書かれた木簡や「和銅開珎」・「神功開寶」・「萬年通寶」などの銅銭、櫛等の他、^(注35)墨書人面土器も出土した。

29. 右京第105次調査は、都市計画街路石見・淀線建設工事に伴い前年度に引き続き実施したものである。前年度の調査では、奈良時代～長岡京期の建物跡や道路側溝、中世の大溝などを検出している。今回の調査では、今里西ノ口地区で長岡京期の掘立柱建物跡2棟を検出した。1つは南側に廂を持つ南北3間×東西3間と推定できる建物跡で、柱間寸法は、東西約300cm、南北は身舎部分で約240cm、廂部分で約300cmを測る。もう1棟の建物跡は、四面廂を持ち南北7間×東西4間と推定でき、柱間寸法は、南北が約240cm、東西の身舎部分が210cm、廂部分が約270cmを測る。これらの建物跡は、有力貴族の邸宅であったと考えられる。他に奈良時代の東西方向の溝や中世の柱穴・井戸等を検出した。今里舞塚地区では、以前から立会調査や地名等から存在が予想されていた今里舞塚古墳の周濠を検出した。周濠は後円部と前方部の一部であることが判明したため、この古墳は南面する全長約50m程の帆立貝式の前方後円墳であったことが確認できた。周濠内からは、多量の円筒埴輪片とともに乙訓地域では初例の人物埴輪の頭部が出土し注目された。古墳の築造年代は、出土した埴輪片から6世紀前半頃と推定できる。長岡京域内には、数年前に確認された今里車塚古墳やこの舞塚古墳のように、長岡京造営やその後の開発により殆ど完全に削平されてしまった古墳が数多くあったものと思われる。他に南北方向に延

びる長岡京期の溝（西三坊坊間小路側溝）や古墳時代の竪穴式住居跡の一部と思われるものを2基、弥生時代の溝等(注36・37・38・39)を検出している。30. 右京第107次調査では、古墳時代後期の土塚墓2基、中世の柱穴群・溝・土塚・石溜り等の遺構(注40)を検出した。31. 右京第110次調査では、長岡京の三条条間小路の北側溝を検出した。溝中からは、長岡京期の須恵器・土師器(注41・42)・土馬等が出土した。

32. 左京第98次調査では、長岡京期の掘立柱建物跡2棟・柵列、中世の土塚などを検出した。建物跡は、東西3間×南北1間以上の東西棟のものと、南北5間以上×東西2間以上の南北棟のものである。遺物は、土師器・須恵器・瓦が多数出土した他、墨書土器が12点(注43・44)出土している。

33. 木津川河床遺跡の調査地は、木津川の北側、木津川と宇治川に挟まれた地域に位置する。木津川河床からは以前より、弥生～鎌倉時代の各時代にわたる遺物が採集されていた。今回の調査でも、明確な遺構面は検出し得なかったものの、弥生時代末～古墳時代前期と中世の土器がかなりまとまって出土した。遺物出土状況等から考えて周辺に集落跡が存在する可能性が極めて高くなった。(注45)

34. 狐谷遺跡は、昨年度8基の横穴を検出した狐谷横穴群の周辺地域の調査であったが、顕著な遺構は存在しなかった。(注46)

以上、当調査研究センターが昭和57年度に実施した発掘調査の概要を述べたが、各調査の詳細については、注にあげた現地説明会資料・中間報告資料・本誌『京都府埋蔵文化財情報』及び年度末に刊行する『京都府遺跡調査概報』等を参照していただきたい。

つぎに、京都府下各地で市町教育委員会等が主体となって行った発掘調査の中で主なものについて簡単に触れておきたい。

丹後地域では、権現山古墳(注47)（久美浜町）・竹野遺跡(注48)（丹後町）・扇谷遺跡(注49)（峰山町）・日置遺跡(注50)（宮津市）・中野遺跡(注51)（宮津市）・入谷西A-1号墳(注52)（加悦町）・田辺城跡(注53)（舞鶴市）・志高遺跡(注54)（舞鶴市）などの発掘調査が行われた。

権現山古墳ごんげんやまは、一辺50mに達する丘陵上の大型方墳で墳頂部平坦面が直径約20mと広く、その中央に竪穴式石室が1基、その周囲を取り囲むように木棺直葬6基及び壺棺1基の主体部が検出された。出土遺物は少なく、銅鏡片1、管玉2の他、土師器の甕・壺・鼓形器台などがあった。また、墳頂部では古代末から中世にかけて築かれた経塚3基・古墓6基も検出され、鉄製経筒・和鏡・鉄刀・銅銭等が出土した。

扇谷遺跡おうぎだにでは丘陵腹部を廻る大溝の延長状況を調査した結果、東側斜面では、さらに北へ100m以上延びていることが確認された。

^{にゆうだにし}

入谷西 A-1 号墳の横穴式石室は、玄室床面より羨道部床面の方が高く、玄門部に階段がつくという特異な形態で、丹後地域では初めてのものである。遺物は須恵器・土師器の他、金環・鉄鏃・馬具・鹿角刀子等が出土している。6世紀前半の築造と考えられる。

^{しだか}

志高遺跡は、由良川左岸の自然堤防上に位置する。今回の調査で初めて弥生時代前期の遺構（柱穴跡多数）が検出され、由良川流域の弥生文化研究の上で貴重な資料となった。他に、縄文時代後期の土壇、弥生時代後期の方形周溝墓が10基以上検出されている。

丹波地域では、^(注55)青野南遺跡（綾部市）・^(注56)綾中麿寺跡（綾部市）・^(注57)中山古墳（綾部市）・^(注58)和久寺麿寺跡（福知山市）・^(注59)愛宕山古墳（京北町）・^(注60)丹波国分寺跡（亀岡市）などが調査された。

綾中麿寺の調査では、多量の瓦が出土した東西方向の溝を検出したが、溝と寺との関係については不明であった。**和久寺麿寺**では建物基壇の一部を検出した。また、^(注61)軒丸・軒平瓦を含む多量の瓦片が出土した。**丹波国分寺跡**では、塔跡礎石群の西側の土壇を調査した結果、5間×4間の金堂跡と推定される東西 19.6 m×南北 15.4 m の乱石積み基壇を確認した。さらに、その基壇の下層から創建当初のものと考えられる瓦積み基壇も検出された。

愛宕山古墳は、一辺約 20 m の中期の方墳である。割竹形木棺の主体部が検出され、仿製獣文鏡3面を始め、鉄剣・鉄鏃・鉈・斧・勾玉・管玉などが出土した。

京都市内では、平安京跡・鳥羽離宮跡等を対象とした発掘調査が数多く行われているが、その結果については、各調査機関の報告を待つこととしたい。また、長岡京跡の調査については、本誌『京都市埋蔵文化財情報』の「長岡京跡調査だより」を参照されたい。

乙訓地域については、ここでは^(注62)長法寺南原古墳（長岡京市）を紹介したい。

^{ちようほうじみなみはら}

長法寺南原古墳は、全長約 70 m・後円部直径 40~50 m の帆立貝式の前方形後円墳とされていたが、今回の調査で、全長 60 m、後方部一辺の長さ 40 m・高さ 5.5 m、前方部の長さ 24 m・幅 26 m・高さ 3.5 m の前方形後円墳であることが判明した。墳丘は、後方部が3段・前方部が2段に築成されており、後方部と前方部の墳頂部に厚さ 1.0~1.5 m の盛土がある以外は、ほとんど地山を削り出していることも確認された。なお、墳丘斜面に葺石がないことは、他の乙訓地域の前期古墳と異なる。

南山城地方では、^(注63)隼上り瓦窯跡（宇治市）・^(注64)大鳳寺跡（宇治市）・^(注65)口駒ヶ谷遺跡（田辺町）・^(注66)相楽山銅鐸出土地（木津町）・^(注67)大昌遺跡（木津町）などで発掘調査が実施された。

^{はやあが}

隼上り瓦窯跡の調査では、飛鳥時代の半地下式登窯が3基検出された。1号窯は全長12 m・床面最大幅 2.4 m で床面は階段状に構築されている。また、窯を馬蹄形にとりまく排水溝を持つ。2号窯は全長 9.5 m・幅 2.0 m で床面は平坦である。窯の右半部に浅い排水溝を持つ。3号窯は全長 11 m・幅 2 m である。床面は築造当初は階段状であったが、

後に粘土を貼り平坦に作りなおされている。窯の右半部に排水溝を持つ。3基の窯跡からは、6種類80余点の軒丸瓦が出土している。すべて飛鳥時代のもので、高句麗系5種・百済系1種である。さらに、6種の内5種が大和豊浦寺出土瓦と1種が岩倉幡枝瓦窯出土のものと同範関係にあることが確認された。このことは、すなわち約90kmも離れた豊浦寺の建立に関わる瓦窯として隼上り瓦窯が成立したと考えられ、当時の寺院建立の過程を考える上で貴重な資料となった。

^{たいほうじ}**大鳳寺跡**では、塔基壇と同じく約18度東へふれる南北溝が検出された。川原寺式・平城宮式等の軒丸瓦などが出土している。

^{くちこまがたに}**口駒ヶ谷遺跡**の調査では、南北朝時代の南北7間×東西3間の礎石建物跡・掘立柱建物跡・柵・土塁・堀・帯曲輪等が検出され、緊急時の城ではなく、日常生活を営んでいた館であったことが明らかとなった。

^{さからかやま}**相楽山銅鐸出土地**^(注68)の調査は、宅地造成中の丘陵斜面から偶然に発見された銅鐸の出土地点を精査し、埋納塚を確認し、他の銅鐸埋納施設の有無を調べるために実施された。銅鐸は扁平鈕六区画袈裟文銅鐸で、総高40.5cm・鐸身高30.0cm・裾部長径21.6cm・同短径12.0cm・鱗を含めた裾部長径26.9cm、総重量1.9kgを測る。京都府下では14個目、山城地域では、京都市梅ヶ畑遺跡出土の4個、八幡市式部谷遺跡出土の1個について6個目の発見になる。埋納塚の調査については、形状等不明な点が多く残った。

^{おおはた}**大畠遺跡**は、相楽山銅鐸出土地の東方約200mの微高地に位置する弥生時代中期の遺跡で、堅穴式住居跡・方形周溝墓・溝等が検出された。集落跡と銅鐸との関係が注目される。

以上、昭和57年度における京都府下の発掘調査を、現地説明会資料を中心にまとめてみた。本稿の各データは現地説明会当時のものであるため、正確な詳細については、各調査担当機関から刊行される報告書等を参照されたい。

(田中 彰=当センター調査課調査員)

注1 杉原和雄「昭和57年における埋蔵文化財の発掘」(『埋蔵文化財発掘調査概報(1983)』京都府教育委員会)1983 p.114~p.126 付表18 昭和57年埋蔵文化財発掘調査届出及び通知一覧

注2 堤 圭三郎「昭和57年度発掘調査予定の遺跡」(『京都府埋蔵文化財情報』(以下『埋文情報』と略す)第4号)1982.6

注3 「古殿遺跡」(京埋セ現地説明会資料 No.82-04)1982.9.11

注4 戸原和人・藤原敏晃「古殿遺跡出土の注口土器・案」(『埋文情報』第6号)1982.12

注5 竹原一彦「下畑遺跡」(『埋文情報』第6号)1982.12

- 注6 竹原一彦「土師南遺跡」(『埋文情報』第5号) 1982.9
 注7 「大内城跡中世墳墓・後正寺古墓」(京埋セ中間報告資料 No. 82-08) 1982.9.18
 注8 伊野近富「大内城跡墳墓発掘調査概要」(『埋文情報』第5号) 1982.9
 注9 注7と同じ
 注10 「後正寺古墓・小屋ヶ谷古墳・洞楽寺古墳」(京埋セ現地説明会資料 No. 82-07) 1982.11.29
 注11 岩松 保「後正寺古墓・小屋ヶ谷古墳」(『埋文情報』第7号) 1983.3
 注12 注10と同じ
 注13 伊野近富「洞楽寺古墳」(『埋文情報』第7号) 1983.3
 注14 岩松 保「山田館跡」(『埋文情報』第8号) 1983.6
 注15 小山雅人「城ノ尾城館跡」(『埋文情報』第8号) 1983.6
 注16 「青野遺跡」(京埋セ中間報告資料 No. 82-09) 1982.10.14
 注17 小山雅人「青野遺跡第7次」(『埋文情報』第8号) 1983.6
 注18 注16と同じ
 注19 小山雅人「青野遺跡第8次」(『埋文情報』第6号) 1982.12
 注20 岡崎研一「千代川遺跡第3次」(『埋文情報』第8号) 1983.6
 注21 「太田遺跡」(京埋セ現地説明会資料 No. 82-06) 1982.10.23
 注22 田代 弘「太田遺跡」(『埋文情報』第5号) 1982.9
 注23 「医王谷3号墳」(京埋セ現地説明会資料 No. 82-08) 1982.12.17
 注24 引原茂治「篠・西長尾奥第1窯跡」(『埋文情報』第5号) 1982.9
 注25 引原茂治「篠・黒岩窯状遺構」(『埋文情報』第5号) 1982.9
 注26 「篠・石原畑窯跡」(京埋セ現地説明会資料 No. 82-05) 1982.10.22
 注27 「亀山城跡」(京埋セ中間報告資料 No. 82-11) 1982.11.2
 注28 土橋 誠「丹波亀山城跡」(『埋文情報』第6号) 1982.12
 注29 「深草遺跡」(京埋セ中間報告資料 No. 82-10) 1982.10.29
 注30 黒坪一樹「深草遺跡」(『埋文情報』第6号) 1982.12
 注31 「伏見城跡」(京埋セ中間報告資料 No. 83-02) 1983.2.25
 注32 長谷川 達「伏見城跡」(『埋文情報』第7号) 1983.3
 注33 「長岡宮跡第123次」(京埋セ中間報告資料 No. 82-07) 1982.9.14
 注34 竹井治雄「長岡宮跡第123次(7AN7F 地区)」(『埋文情報』第6号) 1982.12
 注35 久保田健士「長岡宮跡第125次(7AN3B 地区)」(『埋文情報』第6号) 1982.12
 注36 「長岡京跡右京第105次」(京埋セ中間報告資料 No. 82-05) 1982.9.14
 注37 「長岡京跡右京第105次」(京埋セ中間報告資料 No. 82-12) 1982.12.8
 注38 「長岡京跡右京第105次」(京埋セ中間報告資料 No. 83-01) 1983.1.22
 注39 山口 博「長岡京跡右京第105次(7ANINC-2・IMK 地区)」(『埋文情報』第7号) 1983.3
 注40 山下 正「長岡京跡右京第107次(7ANGNC 地区)」(『埋文情報』第6号) 1982.12
 注41 「長岡京跡右京第110次」(京埋セ中間報告資料 No. 82-06) 1982.9.14
 注42 黒坪一樹「長岡京跡右京第110次(7ANIST-4 地区)」(『埋文情報』第6号) 1982.12
 注43 「長岡京跡左京第98次」(京埋セ中間報告資料 No. 83-03) 1983.3.7
 注44 山下 正「長岡京跡左京第98次(7ANFNT-3 地区)」(『埋文情報』第8号) 1983.6
 注45 長谷川 達「木津川河床遺跡」(『埋文情報』第6号) 1982.12
 注46 久保田健士「美濃山狐谷横穴群」(『埋文情報』第5号) 1982.9
 注47 「権現山遺跡第二次発掘調査」久美浜町教育委員会 1982.8.31
 注48 「竹野遺跡」丹後町教育委員会 1982.11.20

- 注49 「扇谷遺跡発掘調査」峰山町教育委員会 1982.9.21
注50 「日置地区ほ場整備に伴う試掘調査」宮津市教育委員会 1982.5.8
注51 「中野遺跡第4次発掘調査」宮津市教育委員会 1982.8.10
注52 「入谷西A-1号墳発掘調査」加悦町教育委員会 1982.8.21
注53 「田辺城(田辺城遺構第2次発掘調査)」舞鶴市教育委員会 1982.7.11
注54 「志高遺跡Ⅱ」舞鶴市教育委員会 1982.11.8
注55 「青野南遺跡・綾中廃寺跡」綾部市教育委員会 1982.10.9
注56 注55と同じ
注57 「中山古墳発掘調査」綾部市教育委員会 1982.12.4
注58 「和久寺廃寺跡」福知山市教育委員会 1982.11.27
注59 「愛宕山古墳発掘調査」京北町教育委員会 1982.9.11
注60 「史跡丹波国分寺跡第一次発掘調査」亀岡市教育委員会 1982.12.18
注61 大槻真純「和久寺跡第1次発掘調査」(『埋文情報』第7号)1983.3
注62 「長岡京市南原古墳」長岡京市教育委員会 1982.8.7
注63 「隼上り瓦窯跡」宇治市教育委員会 1982.7.17
注64 「昭和57年度大鳳寺跡発掘調査」宇治市教育委員会 1982.9.11
注65 「口駒ヶ谷遺跡」田辺町教育委員会
注66 「相楽山銅鐸出土地発掘調査」木津町教育委員会 1982.8.7
注67 「大鳥遺跡発掘調査」木津町教育委員会 1982.10.16
注68 奥村清一郎・松本秀人「相楽山銅鐸出土地の発掘調査」(『埋文情報』第6号)1982.12

福知山市大道寺経塚出土紙本経の 保存修理とその問題点 <図版>

難波田 徹

1. はじめに

福知山市字今安小字大道に位置する豊富谷丘陵遺跡（大道寺跡）の発掘調査の際に、古墓とともに経塚が1基発見された。このことは新聞紙上にも報道されるなど注目を浴びたわけであるが、それからすでに3年が経過した^(注1)。最近になってまた再びこの経塚が注目されはじめた。その理由の一つは出土品のなかに竹製経筒があったことと、もう一つは紙本経残塊を保存修理することによってその概要が掴めたことであろう。ここではこの二つの観点に焦点をしばりこの経塚を紹介し、その責を果したい。

経塚とは言うまでもなく平安時代後期の末法思想と結びついて經典を永く伝えようという主旨のもとに築かれたと言われている仏教遺跡である。その本義は釈迦入滅ののち56億7千万年後にこの釈迦にかわってこの世を救う弥勒の世まで、經典などを伝えようとするところにあったとされているが、時代とともに極楽往生、現世利益、追善供養などの願意が加わっていき多少の変化はみられる。この埋経は紙に經典を書写し、それを経筒に入れて埋納する紙本経の経塚が主体であったが、この紙は土中の湿気に弱いという欠点をもっていた。このことはその当時からすでに指摘されていることであるが、この紙本経を永く伝えるためのいろいろの工夫が凝らされたのである。紙本経を入れる容器としての経筒、その多くは銅製の経筒であったが、これをさらに外筒、その多くは陶製、土製の経筒であるが、これらに入れて丁寧に埋納したのである。これまでに報告されている平安時代後期の経塚でみると、その多くが銅経筒、陶・土外筒のセットで出土しており、これが紙本経の埋納形態の基本的な在り方のようなのであるが、銅経筒のみのものも勿論ある。

こうして工夫を凝らして埋経したにもかかわらず、現在私たちが目にするものは容器ばかりであり、肝心の経巻は経筒のなかで残塊状



経筒埋納状況

になってしまっているものが大半である。銘文を刻んだ経筒に入った経巻であればどのような目的で埋経しようとしたのかということもある程度の推定も可能であるが、無銘の経筒ということになれば埋経の目的すら不明ということになってしまう。こうなると残塊状になった紙本経に保存修理を加え、その実態を掴むしかない。これまでにも保存修理によって紀年銘をはじめ目的などを記した銘文が発見されたことを思えば、その結果はともかくとして重要な作業ということになる。

2. 保存修理前の問題点

この経塚について私なりに注目していたのは次の二点であった。その一つは竹製経筒が2口出土していることと、もう一つは銅経筒と陶外筒の製作年代に若干のずれがあることであった。後者については、竹原氏も経筒の製作年代に触れるなかで銅経筒と陶外筒の年代に若干の差のあることを示唆されているが、この差のあることは経塚の築造年代を考察するうえで重要なことであった。この年代の差から竹原氏は鎌倉時代初頭の築造という結論を提示されている。このことについては今後も検討を加えていきたいが、特に注目しなければならなかったのは竹製経筒の出土であった。

竹製経筒を注目したのは、嘉禎2年(1236)に宗快の撰した『如法経現修作法記』や金剛仏子覚源の『如法経私記』などの記録を実証したからであった。必要な部分だけを引用するが、前者のには「如法経筒奉納次第」のなかに「……筒銅、或又用竹筒」とあり、後者のには「写経事」のなかに「筒奉納用。近来竹筒宜敬云々」とある。これらの記録などから、いままでも経筒に銅とともに竹製の筒も用いられていたことがわかっていただいわけであるが、これまでに経塚からこの竹製の経筒が出土したということを知ることがなかった。出土していた可能性もあろうが、これが学術的な発掘調査で出土したことの意義は大きい。これまで仏像の像内納入経巻の容器に竹筒が用いられていたということは二、三(註3)報告されているが、経塚でも用いられていたことを実証したのである。

私なりに以上のような漠然とした考えをこの経塚にもっていた矢先、これら遺物のなかで銅経筒に納入されていた、見た目には8巻分と思われる紙本経残塊が保存修理のために京都国立博物館文化財保存修理所内の岡墨光堂に持ち込まれた。その時の状況は図版3のような状態であり、どのように保存修理を加えたらよいのか、むずかしい問題をかかえていた。センターの堤課長や施工者の岡岩太郎氏との話し合いのなかで、ともかく解いてみようという結論に達したわけである。これまでにもこの種の埋納紙本経の保存修理が全く行われなかったというわけではなく、岡墨光堂でも高野山奥院経塚の紺紙金泥経や近年では京都市左京区の花背別所経塚の紙本経の保存修理の経験があった。しかし埋まっていた

土中の状況によって紙本経の残り方も千差万別であり、これは持ち込まれた際には上半分が腐蝕していた。8巻分ということであったが、巻かれた状態で固まっていたもの6点、ぼろ状になっているものが2点で、すべてが湿気のために卷子の姿をとどめていなかった。紙の法量も16.0cmから8.8cmと不同であり、巻かれていた紙と紙とは固着しており、本紙は綿状になっていた。

3. 保存修理中の問題点

このような状態のものを保存修理していくわけであるが、その工程としては、

- (1)巻いて固まっている状態の経巻を水等によって丁寧に剥ぎ取り伸ばしていく。
- (2)展開後、水溶性樹脂(P. V. A)によって補強する。
- (3)最寄の補修紙により欠失箇所を補紙を施す。
- (4)肌裏を打ち補強する。
- (5)各本紙にもう一度裏打を施し、よく照合し継ぎ合わせる。

の順序で行ってきたわけである。今回特に(1)の作業では、フラスコ内の水をバーナーで熱して蒸気をつくり、わずかにふくらんだ紙をピンセットで剥がしていく方法をとったわけであるが、これが成功したと言えよう。この作業は特に根気のいる仕事であるが、岡墨光堂の菊地英恭氏が三か月ほどかけてこの作業をされ、ともかく経巻を剥ぐことができたのである。菊地氏の労苦に対して敬意を表さねばならないが、この作業がこうした保存修理の結果を左右するのである。この慎重な作業の結果、多くの成果を納めることができたのは喜ばしい限りである。

つぎに残された厄介な作業は、書写されていた経典が何であったかということであるが、展開後、これと取り組んだ。幸いこの種の経典を書写する場合、経典通りに1行17字詰で書写されるのが通例であるので、比較的残りのいい部分の経文を中心に経典と対校した結果、妙法蓮華経8巻と阿弥陀経1巻であることがわかった。持ち込まれた際、見た目に8巻分とみえていたのが、実は9巻だったという新しいこともこの時に判明した。経典が確認された次には工程の(5)とも深くかかわってくるわけであるが、残された経文がどの部分にあたるかという作業がある。土中にある間に湿気などの関係であろうが、墨書された経文が二重写しの状態になっているところもかなりあり、また紙そのものが欠落しているなど、思っていた以上に経文の確認に時間を費すこととなった。かなりの時間をかけてこの作業を行ったわけであるが、経文末確認のまま一部残さざるを得なかったところもあった。

4. 保存修理後の問題点

保存修理の結果、次のような知見を得た。

- (1)紙本経は9巻あったこと。
- (2)経典は妙法蓮華経と阿弥陀経であったこと。
- (3)頓写経であったこと。
- (4)状態からして当初から軸はなかったのではないかということ。
- (5)天地の復原寸法を 21.3 cm にしたこと。

このうち巻かれている状態からして当初から頓写経であることは確認していたが、経塚出土のものにはこうした例が多く見い出せる。このことが軸の有無と深くかかわっているであろう。書写後に巻き戻さずにそのままの状態にしておくわけであるから、いわゆる奥書の部分が上部にきているのである。その意味でも、こうした保存修理を加える場合、より慎重に表面の剥ぎ取りを行う必要があるわけである。ともかく修理の結果、妙法蓮華経と阿弥陀経が書写された経典であったことが確認できたことは成果の一つと言えようが、これまでに出土した銅経筒の銘文などから平安時代後期のものをみても、妙法蓮華経と阿弥陀経というのは珍しい。書写された経文の書風については平安時代後期(12世紀中葉)ではないかと考えられるが、そうするとこれを納めた経筒の年代と同時期ということになり、保存修理によってよりそのことに説得性をもたすことができたわけである。なお、天地の復原寸法を 21.3 cm としたのは当然経筒の内寸法を考慮したことは言うまでもないが、同時期と思われる経巻の天地寸法の多くが 21.3~21.5 cm ということによる結果でもあった。

5. おわりに

さきに竹原氏がこの経塚の築造年代を鎌倉時代初頭とされた。このことには異論がないが、写経された時期は12世紀中葉ごろと考えられ、銅経筒もその形状から考えてその時期と考えると差しつかえない。銅経筒と陶・土外筒のセットでの埋納方法が基本であったと考えられるが、これまでの例でもそれぞれの経筒に年代の差があることが多く指摘でき、写経後すぐに埋納されたと考えられるには無理があった。このことについては、写経後に社寺等に奉納され供養ののち土中に埋納されたのではなかろうか。そうすると銅経筒と陶外筒の年代差についても理解できるわけである。今後の課題としては、この経塚の築造の背景についての追求であろう。

(難波田 徹=京都国立博物館資料管理研究室長)

(注は43ページ)

古代エジプト遺跡を訪ねて (5)

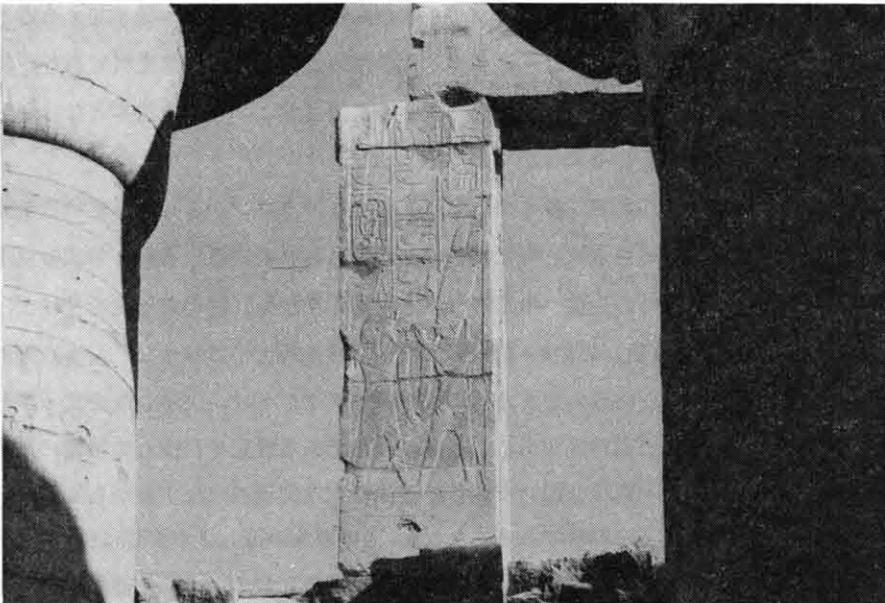
小山 雅人

VI ラメセス朝

上エジプト第4州テーベ（古代エジプト名ウィーセ、またはウェーセ、「笏」の意）の都を中心に華麗な文化の華を咲かせた新王国時代も、その後半のラメセス朝（第19・20王朝前1308～1087年）に入ると、絶頂期を過ぎ、政治・経済・社会面におけると同様、建築・美術・工芸等の文化面においても退廃の色が見られ、硬直化して行く。

「エジプトの太陽」と呼ばれたラメセス2世の長い治世中（前1290～1224年）に建立、あるいは増改築された諸神殿の多くが現存し、この王のカルトゥーシュ（王名）はエジプト全土に刻まれている（第1図）。しかし、その巨大さに反比例するように、大味で魅力に乏しい。西テーベで最も楽しい遺跡巡りが貴族の墳墓であることは前々回に書いたが、同じ新王国とは言え、ラメセス朝の墳墓の壁画は生気に欠け、描かれた人物もあまり人々をひきつけない。

第19王朝の末期から第20王朝の終りまで、王位継承の詳細については、説が定まらず、特にラメセス朝末期の弱小な諸王に関しては、その年代・業績とも不明な点が多い。とこ



第1図 カルナック 神殿にて



第2図 墓地労働者の集落跡デール・エル・メディーネ遺跡

ろが、経済・社会に関しては、これ程多くの史料に恵まれた時代はないことも事実である。ラメセス3世に対する後宮内の陰謀事件を裁いた文書、王陵の盗掘犯の逮捕と制裁の記録、ある神官の横領や姦通の告発書、役人の背任を示す文書、給与支払いの停滞に起因する王陵の労働者達のストライキの記録等々のパピルスが残っている。また、様々なメモ書きをした石片や陶片（オストラコン）は、わが国古代の木簡と同様の重要な史料であり、特に物品売買の証書の類は、当時の物価の研究を著しく進展させた。経済の基本となる金銀銅の相場もほぼ年代を追って知ることができる。

教科文書という短文集がある。多くのパピルスやオストラコンから知られているテキストで、学童・学生の書写・書き取り等に供されたと考えられている。書簡・書式の見本、神々への讃歌・祈り、教師の生徒への警告（昼も夜も本を読め、酒と女に気を付けよ、云々）・書記業（つまり公務員）の勧め（書記になれ、百姓や兵士にはなるな、云々）等々の短文を総称して教科文書というのであるが、この種のテキストは、上述した公式・半公式的な文書とはまた異なった面白さがある。最高の職業である書記を目指して学業に励めという教師の言葉は、職業の貴賤を説いており、現代日本の倫理には反するかも知れないが、当時の職業や社会に関する好資料である。ただし、他の職業の苦しさの描写には、若干——否、かなりの誇張を割り引いて読まねばならない。教師のしつこいまでの言葉の裏には、農作業の方を好んだり、軍国主義のラメセス朝の軍人にあこがれる子供も少なくなかった

という事実があったらしいからである。

先に、ラメセス朝はあらゆる分野で衰退に向かい始めた時代と書いたが、少なくとも文学の面では、新たな発達が見られる。それは恋歌の登場であり、他の物語や思弁文学にも増して生彩を放っているのである。現在、歌集8篇に断簡を合わせて70近くの歌が知られている。短いものをいくつか紹介しよう。なお、「兄」「妹」は、夫婦や恋人同士を指す言葉で、わが国古代の「妹・背」に相当する。

妹は何て投げ縄が上手いんだ、
家畜税も納めてないのに。(「プロでもないのに」の意)
その髪で僕に輪を投げる。
僕を率くのはその瞳、
従わせるのはそのお尻、
指輪で僕に焼印を押す。

(P. Beatty, 17, 2-4)

次は、都々逸風に訳してみたもの：

口づけをして、
唇開らく。
いとも嬉しや、
麦酒なくて。

(O. Cairo, 16)

恋愛歌に酒はつきものである。しかし、次のは、少し行き過ぎであろう。

小川の向うにお兄さまがいた、
流れに足をつけて。
一日中、お祭り騒ぎ、
酒飲み仲間と一緒にです。
彼は私を赤面させます。
ずっと吐きっぱなしですもの。

(P. Beatty, 17, 4-6)

こういう状態で、彼女(恋人であれ、妻であれ)の家に帰ると、次の歌のような運命が待ち受けていたであろう：



第3図 宴席の女楽師
(ナクトの墓 第18王朝中葉)

我々が古代エジプト人に対して持っている印象とイスラームの戒律ほど相反するものはない。カイロの繁華街は、フランス風の街並みと相まって、ヴェールを付けた女性も殆どなく、まるで南欧の大都市といった風情である。従って、酒の類もちゃんとある。葡萄酒には「オマル・ハイヤム」という絶品があり、ビールには「ステラ」がある。ある旅行案内書には、このビールをまずいと書いてあったが、全く逆である。少なくとも、ヨーロッパの飲んだ後で口の中に甘みが残るビールより、余程われわれ日本人の口に合い、この「ステラ」なしのエジプト旅行は楽しさが半減するであろう。何しろ、遺跡——例えば神殿建立に徴用された古代の人夫に配給された食料は、あるパピルスによれば、パンとタマネギとビールであったのである。何ともエジプト的であるのだが、この「ステラ」のラベルには殆どお目にかかれない。大抵が肩のあたりが細かい傷で白っぽくなり薄汚れた瓶のままである。筆者など、最初は密造酒ではないかと疑った程である。第4図は、メニアの駅前の雑貨屋で買った瓶に付いていた貴重なラベルである。

閑話休題。恋歌と言いながら、酒気を帯びた諧謔的な歌ばかり出してしまったが、例えば日本の演歌、フランスのシャンソンの如く情感のこもった歌も少なくない。恋愛心理の濃やかな表現は、ラメセス朝文学の素晴らしい達成のひとつである。次に訳出するのは、女の溜め息の聞こえるような傑作である。

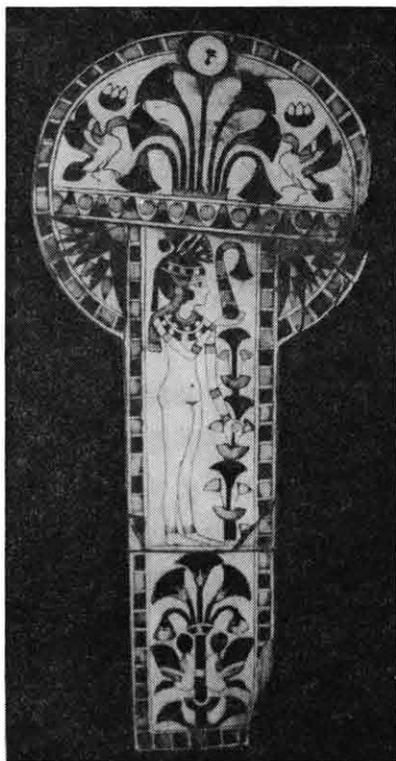
妹の僕に対するこの仕打ち、
これが黙っておれようか。
戸口に僕をつつ立たせ、
自分の中へ入っちゃった。
「おかえりなさい」とも言わず、
一晩中、ほったらかしだ。

(P. Beatty, 17, 6-7)

中世以降、エジプトはイスラーム国である。しかしながら、やはり古代からの名残りであろうか、イスラーム圏の諸国の中では戒律に対して最もルーズである。実際、



第4図 「ステラ」ビールのラベル (縮尺1/2)



第5図 庭園の王女
(第21王朝の鏡箱蓋 カイロ博蔵)

逃げて行く、わたしの心は大急ぎ、
わたしが恋人を想うから。
わたしを普段のように振舞わせず、
体の中から抜け出してしまう。
わたしに衣をとらせてくれず、
扇も装わせてくれない。
わたしは目に化粧もせず、
香油も全然塗ってない。
「待たずに、お行き」と心は言う、
わたしが彼を想うたびに。
そんなにしないで、馬鹿な心ね。
なぜ気違いみたいな真似するの。
静かにお待ち、お兄さまはいらっしゃる。
けれど一緒に、沢山の人の目も。
人々に言われちゃいけない、
「恋に狂った女だ」なんて。
じっとして、彼を想う時は、
心よ、逃げて行かないで。

(P. Beatty, C 2, 9-3, 4)

文字という人間の道具は、大変なものである。日本の場合、どんなに美しい弥生土器も、どんなに大きな古墳も無言である。「土器や古墳が歴史を語る」と言う。ロマンティックなこの表現を論う訳ではないが、古代の文化や歴史を語るのは、あくまで現代の考古学者であり歴史学者である。ところが、エジプトと古代遺跡に立つと、柱や壁や石碑がその象形文字で、神々に愛でられた王や貴族の言葉、あるいは葬送の呪文を語るのが聞こえるのである。言葉は真実以上に嘘を語るものであるから、それは歴史的事実でないかも知れない。しかし、その書かれ刻まれた言葉は、歴史の確かな一時点における祈りであり、願望であり、誇示であり意志である。そして、先程のパピルスに書かれた切ない恋の詩は、紀元前12世紀の、おそらくテーベの、名も知れぬ乙女の心の表現であったのである。

(小山雅人=当センター調査課調査員)

昭和57年度発掘調査略報

20. 青野遺跡第7次

所在地 綾部市青野町西吉美前
調査期間 昭和57年7月12日～11月18日（途中約1か月の中断あり）
調査面積 約500m²

はじめに 今回の調査は、昨年度に引き続き、京都府土木建築部道路建設課による白瀬橋橋梁新設改良工事に伴うものである。調査地は、青野遺跡A地点（関西電力青野変電所用地）の北の2か所である。

調査概要 北と南の調査地に各々トレンチを設定し、北をA、南をBと名付け、掘削を開始した。Bトレンチについては大半が道路及び堤防にあたるため、一部を除いて11月に調査を行った。

北のAトレンチでは、包含層の下の遺構面で、竪穴式住居跡1基（SB 8201）と数個のピットを検出したのみである。後者については、不規則であり平面プランは復原できない。前者についても、半分以上が調査範囲外にあり、全容は詳かでないが、柱穴1個を検出した。周溝はない。出土遺物から7世紀の後半に位置づけられる。Bトレンチでは、北東部に1条の溝を検出したただけであるが、この溝は第8次調査でのSD 8201の延長であろう。

まとめ 今回は、数次にわたって調査が続けられている青野遺跡において、最も北での調査であった。夥しい遺構・遺物が検出されたA地点や第6次調査地と間近の位置にありながら、遺構・遺物共にかなりまばらな様子が知られたが、この辺が青野遺跡の北限にあたるとも考えられる。しかし、AトレンチでSB 8201を検出したことは、青野・綾中地区の7世紀住居跡群が河岸近くにまで広がっていたことを示唆していると言えよう。

（小山 雅人）



調査地位置図

21. 城ノ尾城館跡

所在地 福知山市大字宮小字城ノ尾
 調査期間 昭和57年12月22日～昭和58年3月29日
 調査面積 約 500 m²

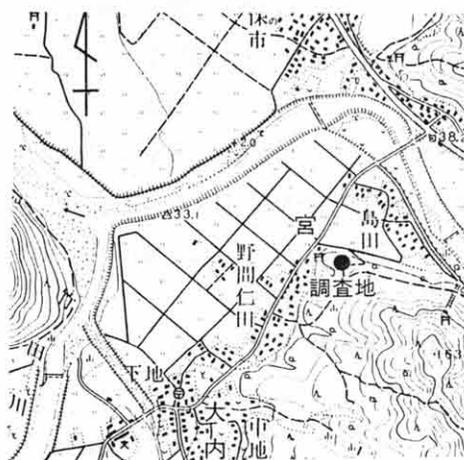
はじめに 調査地は宮遺跡がある丘陵の尾根先端部近くに位置し、比高約 17 m を測り、国道 9 号線（旧山陰街道）に沿う長田・多保市・岩崎・池田の各集落や長田野丘陵・土師川が一望できる極めて眺望の開けた所である。

調査概要 地形測量後、土塁状の地形に囲まれた部分（約 15 m×60 m）を全面発掘したところ、以下の遺構を検出した。

(1)掘立柱建物跡 SB 01 東西 5 間、南北 3 間 (9.0 m×5.4 m) の総柱建物。(2)掘立柱建物跡 SB 02 東西 3 間、南北 4 間 (6.0 m×7.2 m) の総柱建物。(3)平行ピット列 SC 01 東西 1 間、南北 8 間 (1.9 m×15 m)。(4)土(石) 塁 SA 01 総長 70 m、調査地区の北・西・南辺を巡る。(5)溝 SD 01 総長 80 数 m、SA 01 の内側に沿う。(6)竪穴式住居跡 SB 03 方形、南辺と東西両辺以外は削平。一辺 4 m 前後の住居跡。(7)土壇 SK 02・SK 04 共に浅い皿状を呈し、焼土・炭を含む。(8)他にピット多数がある。

出土遺物は、①弥生（中期）土器、②古式土師器、③中世土器に分かれるが、②が圧倒的に多い。他に、石包丁片・砥石等がある。

まとめ 城ノ尾城館跡は、大きく 2 時期に分かれる。第 1 期は、弥生～古墳時代前期であり、SB 03 は出土遺物②群を伴い、古墳時代初頭に位置づけられよう。SK 02・04 もこの時期に属する可能性が高い。第 2 期は、鎌倉時代で、SB 01・02、SA 01、SC 01 は、いずれも同時期の遺構と判断される。遺構に比して遺物（瓦器片が主）の少なさが指摘できる。SB 01 を建てるために、かなり第 1 期の遺構を削平し、造成したことが、SB 02 のベースを成す層から出土した古式土師器片の数から推定できる。



(小山 雅人)

調査地位置図 (1/25,000)

22. 山田館跡

所在地 福知山市字大内小字大内山田
調査期間 昭和57年12月6日～昭和58年3月30日
調査面積 約 1,000 m²

はじめに 山田館跡は、国鉄福知山駅の南東約 6 km の福知山市大内にある。当調査研究センターが昭和56年度と57年度の2年度にわたって、発掘調査を行った大内城（平城）跡の南へ約 1 km の丘陵上の、標高 90 m 前後、比高差約 20 m を測る地点に位置する。今回当地に近畿自動車道舞鶴線の建設が計画されたため、事前に発掘調査を実施した。発掘対象地は南北 25 m、東西約 45 m で面積は約 1,000 m² 余りである。

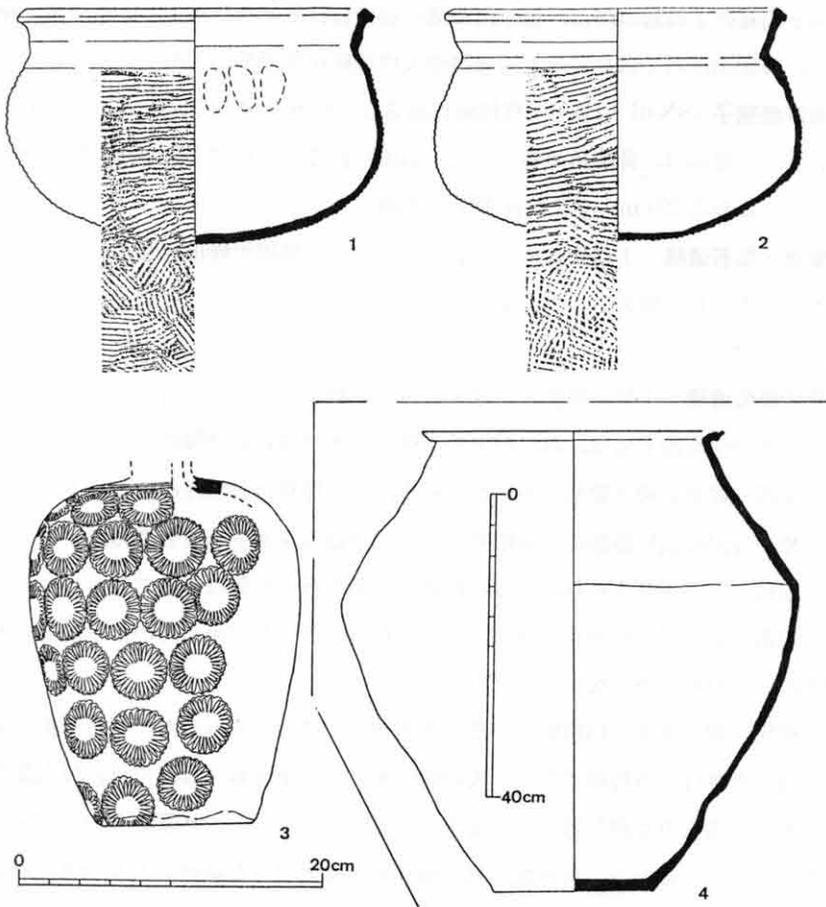
当遺跡の所在する尾根すじは、平坦な面が山の奥まで続いており、その平坦面に 15 m の長さにわたって「土塁状」の盛り上がりが見られた。周辺の大内城跡、後青寺城館跡との関連から当遺跡も城館跡に関係するものと考え、調査に着手した。

遺構・遺物の概要 調査地のほぼ中央に長さ約 15 m・幅約 4 m・高さ約 0.5 m の「土塁状」の盛り上がりが見られた。土塁は主軸方向を北東から南西にとる。土塁の表土をはぐと、表面に石が葺かれていた。石の葺き方の密度は様ではなく、北東部 3 分の 1 と南西部 3 分の 1 とに石が密集しており、中央部 3 分の 1 にはほとんど石は見られなかった。これらの自然石の間に五輪塔の火輪（片）3・風輪1・空輪片1がはさまっていた。この石を除去した段階で中世陶器 1 (SX 01-A), 土師器鍋 6 (SX 01-B~G), 瀬戸焼瓶子 1 (SX 01-H) が蔵骨器に転用されているのが見つかった。他に20基以上の集骨・集石遺構がある。

(1) **中世陶器 (SX 01-A)** 土塁状遺構の東方約 4 m の地点に埋置されていた。高さ約 60 cm・口径 40 cm・最大腹径 60 cm の丹波焼の甕である。この甕の周囲には列



第1図 調査地位置図 (1/50,000)



第2図 蔵骨器実測図

- 1. 土師器鍋 (SX01-C)
- 2. 土師器鍋 (SX01-E)
- 3. 瀬戸焼瓶子 (SX01-H)
- 4. 中世陶器 (SX01-A)

石が見られ、その下から比較的浅い土塚を4基検出した。内部に炭と焼土が混ざることから、火葬墓に係わるものと判断できる。

(2) 土師器鍋 (SX01-B~F) すべて土師質の鍋を蔵骨器に転用したものである。B・Cは土塚の南西部に埋納されており、D・E・Fは北東部で検出された。葦石がほとんど見られなかった中央部付近では、蔵骨器類の出土はない。鍋の内部にはすべて骨が納められていたが、副葬品はほとんどない。SX01-Cは、鍋を埋置する土塚が掘られていただけであったが、SX01-B・D・Eは、土塚の底はさらに直径10~20cm程度の小さな穴が穿たれており、そこに少量の骨片が混ざっていた。土塚のまわりには、30cm程度の石を置き上部施設とする。蔵骨器を覆う蓋はほとんどの場合わからなかったが、SX01-Fの鍋の上には、平らな石が置かれていた。

これらと同種の土師器の鍋は、福知山市域の他では兵庫県神戸市・三田市で多く検出されており、福知山市内では今安の大道寺跡や大内城跡中世墳墓から出土している。

(3) 瀬戸焼瓶子 (SX 01—H) 土壘状隆起から少し離れた SX 01—C・G の西側に埋置されていた。口頸部は、骨を納めるために意図的に打ち欠かれていたがそれ以外はほぼ完形であった。現存高 23 cm・最大腹径 18 cm を測る。

(4) 集骨・集石遺構 土壘状遺構を中心として、その周辺で検出されている。浅く掘りくぼめたところに骨を埋める。骨の量には多寡があり、とうてい一体分とは考えられない。副葬品は全くない。

(5) その他の遺構 土壘の周囲に土塚・ピットが数個あるが、土器の出土はほとんど見られない。広い平坦地上には、墓に対する「拝所」的な建物跡は検出されなかった。なお、調査地の東部に数条の溝と数基の土塚があるが、その性格等は現在のところ不明である。

まとめ 今回の山田館跡の中世墳墓について問題点をまとめておきたい。

(1) 「土壘状」の高まりを造り、そこに複数の埋葬を行った例は極めて珍しい。

(2) 土師器鍋を蔵骨器に転用する時は、すり鉢などを蓋として用いるのが一般的であるが、今回はそのような例は全くない。

(3) 鎌倉後期～南北朝期の14世紀代がその実年代として与えられるが、これは大内城の中世墳墓の造営と併行する時期である。大内城の墓には、須恵器三耳壺や丹波焼大甕などの特注品と思われるものが蔵骨器として使用されているのに対し、当墓のものは日常雑器の転用である。このことから、大内城の墓の被葬者とは異なった階層の人々の墓の形態が明らかになったといえよう。

この中六人部地区だけでも、宮遺跡古墓・大内城中世墳墓など、中世墓の資料が増加しており、当地の中世史を考える上での貴重な事例の一つに加えられることと思う。

(岩松 保)

23. 千代川遺跡第3次

所在地 亀岡市千代川町小林西芝・湯井巽筋，大井町小金岐北浦
調査期間 昭和57年11月17日～昭和58年3月31日
調査面積 約 3,000 m²

はじめに 今回の調査は，日吉ダム建設事業に伴う集団移転地の発掘調査である。

調査地は，国鉄山陰線千代川駅の南西約900mに位置し，湯井遺跡と馬場ヶ崎遺跡の中間にあたる。湯井遺跡では，弥生式土器片が採集されており，馬場ヶ崎遺跡では，昭和52年度に亀岡市教育委員会によって，弥生時代後期の溝が検出されている。また，千代川町北ノ庄において当調査研究センターが調査を行った千代川遺跡（第2次調査）からは，弥生時代後期から平安時代にかけての遺構や遺物を検出している。今回の調査地も前記した遺跡と同じく行者山から派生した微高地上に位置することから，弥生時代から平安時代の遺跡が存在すると考えられた。

調査概要 調査は，西側の高台の部分の試掘を重点的に行うことから開始した。調査を実施するにあたり，南北方向をA～Cの3地区に分け，さらに小地区を設定して4m方眼に区画し，東西方向を数字で表わす地区割を行った。地区名は，南西隅の杭を基準とした。



調査地位置図 (1/50,000)

層位は，高台の部分では耕土・淡茶褐色土・黒色土（流土）・黄褐色土（地山）であるが，調査地の東側になると，耕土の下はすぐ黄褐色土（地山）となり，淡茶褐色土や黒色土は見られない。このあたりは，最近まで瓦の土取り場であったことから，かなりの削平を受けているものと考えられる。遺物は，主に黒色土層から瓦器・土師器・須恵器等が出土しているが，遺構に伴うものはない。

試掘を行っていたところ，CJ 26 グリッドで幅約50cmの南北方向の溝を検出した。溝内から布留式土器片が出土したため，

大きく拡張したところ、幅約 10 m を測る東西方向の溝 (SD 01) と、それに合流する溝 (SD 02)、および竪穴式住居跡 2 基を検出した。溝 (SD01) の範囲確認のため、さらに拡張を行った結果、調査地の西端から東端まで約 150 m を確認した。

検出遺構

(1) 溝 SD 01 小金岐古墳群が位置する丘陵裾部から東流し、千代川町小林を流れ、大堰川に合流すると思われる自然流路である。調査範囲内での規模は、幅約 10 m・深さ約 1.5 m・長さ約 150 m を測る。溝内の堆積土は大きく 3 層に分かれ、上層には古墳時代から平安時代の須恵器片が混入しており、中層と下層からは、布留式土器片と木製品が出土している。堆積の状況や出土遺物等から、溝は短期間で埋まったものと思われる。

(2) 溝 SD 02 SD 01 に近づく程、広く深くなる。その規模は、幅 1 m 前後で最も深いところで約 1.2 m を測る。溝内出土の遺物は、主に布留式土器片で、木製品はごくわずかである。土器片は流れてきたものもあるが、投棄された状態で出土したものもある。

(3) 竪穴式住居跡 SB 01 5.5 m×5.0 m のやや東西方向に長い方形の竪穴式住居跡であり、壁面の高さは約 20 cm を測る。ベッド状遺構を有し、その四隅では柱穴を確認している。貯蔵穴が住居跡南辺中央部と北東隅の 2 か所に設けられている。住居内からは、布留式土器片が出土している。

(4) 竪穴式住居跡 SB 02 SB 01 よりも小規模な住居跡で、4.5 m 四方のものである。壁面の高さは約 10 cm を測り、SB 01 程明確ではないがベッド状遺構を有している。南東隅には貯蔵穴が設けられている。この住居内や周辺からは柱穴を検出していない。おそらく床に直接柱を立てて竪穴住居を建てたものと考えられる。住居内からは、わずかであるが布留式土器片が出土している。

まとめ 今回の調査では竪穴式住居跡 (SB 01・SB 02) と、それを囲む様な溝 (SD 01・SD 02) を検出した。この検出状況から SD 01 と SD 02 は、環濠の役割を果たしていたものと考えられ、検出した住居跡の西側には、さらに住居跡や倉庫跡等が存在するものと思われる。また、遺物に関しては、弥生時代から近世にかけてのものが出土しているが、主に古墳時代前期の遺物が、溝内や竪穴式住居跡内から出土している。

このように、溝内出土遺物と竪穴式住居跡内出土遺物が同時期のもので、検出した遺構同士の切り合い関係が見られないこと等から、当調査地は、短期間存続した集落遺跡の一部であると思われる。検出した住居跡の西側をさらに調査することにより、一集落の規模解明が可能になると考える。

(岡崎 研一)

24. 長岡京跡左京第98次 (7ANFNT-3 地区)

所在地 向日市上植野西大田
 調査期間 昭和57年12月20日～昭和58年3月14日
 調査面積 約 500 m²

はじめに 本調査は、京都府教育委員会が府立向陽高等学校敷地内に格技場を建設することになり、その地が長岡京跡の一面にあたるため、工事に先立ち実施したものである。

昭和49・50年度に実施された高校建設に伴う調査では、奈良時代のしがらみ遺構、長岡京期の建物跡・条坊遺構、中世の集落跡等の遺構が検出されており、とりわけ長岡京の条坊遺構の存在が確認されたことは、その後の京域解明の指針となった。

今回の調査地は、高校敷地内の北東隅にあり、平城京型に復原された条坊図によれば、長岡京の左京三条二坊五町に推定される。以上のような位置・環境から、長岡京の町割の一端を明らかにすることを今回の調査の主目的とした。

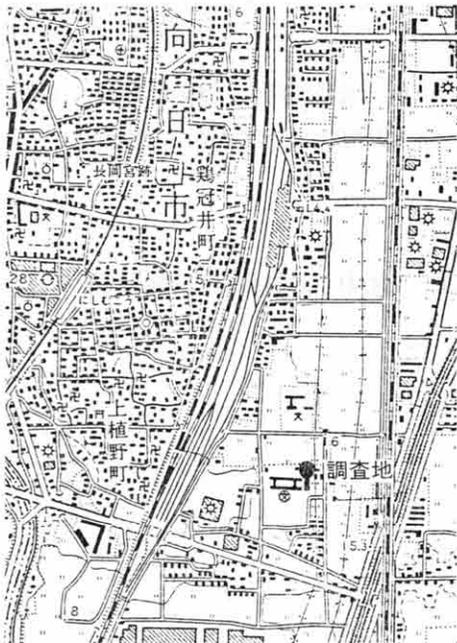
調査概要 今回の調査では、長岡京期に属すると思われる建物跡 (SB 9801・SB 9802)、柵列 (SA 9803)、中世の土坑 (SX 9805) などを検出した、さらに下層から、

トレンチの南側で流路 (SD 9806) の存在を確認した。以下主要な遺構の概略を記す。

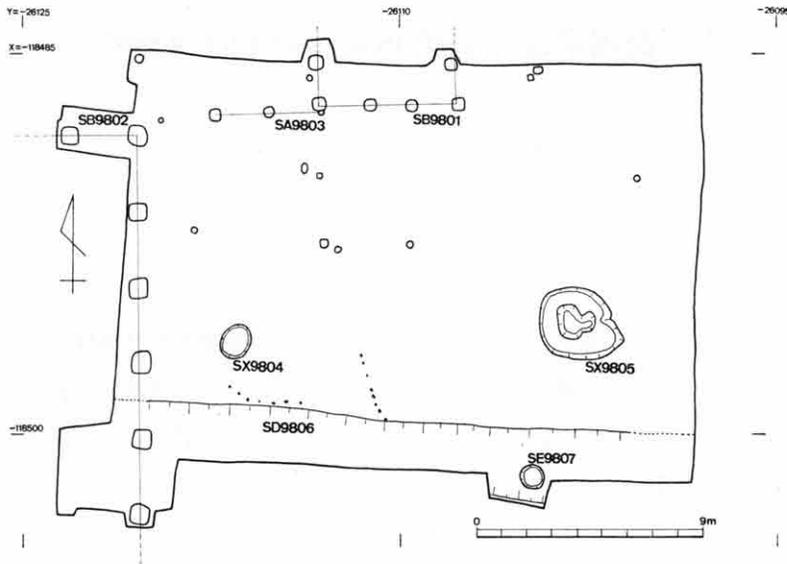
掘立柱建物跡 SB 9801 は、東西3間・南北1間分を検出し、梁行2間・桁行3間の規模をもつ東西棟の建物が想定される。柱の掘形は一辺0.5m前後を測り、それぞれの柱間はほぼ1.8m(6尺)間隔で揃う。

掘立柱建物跡 SB 9802 は東西1間分、南北5間分を検出し、柱間は、3m(10尺)間隔で並ぶ。柱の掘形は一辺0.7~0.8mの規模をもち、隅丸方形を呈する。柱掘形には、自然石や板材を礎盤として利用するのがみられた。

柵列 SA 9803 は直径0.3~0.4mの掘形をもつ柱列である。柱間は、ほぼ2.1m



第1図 調査地位置図 (1/25,000)



第2図 調査地平面図

(7尺)で並ぶ。

土坑 SX 9804 は、南北 1.25 m・東西 1.2 m・深さ 0.3 m を測り、坑内には小礫のうすい集石が認められ、その上にはうすい数枚の板が配してあった。

土坑 SX 9805 は、南北 2.9 m・東西 3.0 m で、2 段に掘り込まれていた。1 段目の平坦な部分から下駄、土師皿（完形）2 枚が出土した。

流路 SD 9806 は東西方向に走り、深さ 0.2~0.5 m と比較的浅い。溝の北の肩には護岸用と思われる杭が打ち込まれていた。この流路は、SB 9802 の造営に際して埋められている。

まとめ 以下、今回の調査成果をまとめておく。

- (1)左京三条二坊五町推定地の北辺で、長岡京期と思われる建物跡 2 棟を検出したこと。
- (2)遺物には、墨書土器、転用硯が見られること。
- (3)調査地の南側には、自然流路の澱みがあったこと。

(山下 正)

府下遺跡紹介

12. 大宮売神社遺跡

大宮売神社は、京都府中郡大宮町字周枳^{すき}にあつて、大宮売神と若宮売神をその祭神としている。若宮売神については不明な点が多く詳しくは知りえないが、大宮売神は、神祇官西院の八神殿に祭られた神として著名である。神祇官西院には、このほか、タカミムスビ・カミムスビ・イクムスビ・タルムスビ・タマルムスビといったムスビの神や、ミケツ・コトシロヌシのような神までである。普通、神は、精霊神（魂や事物にとりつく霊威）から人格神（人の姿をしている）へ発展したといわれているが、神祇官西院の神は、古い精霊神の段階に留まっているものが多い。大宮売神がこの中に入っている理由はわからないが、何かのことで丹後の地方神が宮中にとり入れられたのかもしれない。

大宮売神社には、「徳治二年^丁五月七日」の銘の入った石燈籠もあり、『延喜式』神名帳にみえる大宮売神社とみて誤りなく、その場所も古代以来、移動せずに現位置にあったとみられる。

大宮売神社遺跡は、上記の神社の境内を中心とした地区にあり、弥生時代後期（2～3世紀頃）の遺物が出土している。それ以降についても、滑石製模造品・手捏土器・須恵器等が出土しており、時期的には弥生時代～古墳時代（4～7世紀頃）まで何らかの遺跡が存在したことを確認する。



第1図 大宮売神社遺跡位置図 (1/50,000)

遺跡の性格だが、出土遺物から考えてみると、ここからは、石製模造品が多く発見されている。石製模造品とは、滑石^{かつせき}や蠟石^{ろうせき}といった、比較的柔らかい石材で種々の器物の形を模造して祭祀に用いたもので、もとより、実際の生活の中で使用されたものではない。この遺跡からは、身体を飾った勾玉・管玉・小玉（1つもしくは少数の勾玉を中心に管玉と小玉を多数組みあわせてつくったネックレス）の模造品や、鏃形品（矢の先につけたもの）のような武器の模造品、円形鏡形品（鏡を模造したものか？）のようなものまであり、多種多様である。



第2図 大宮売神社遠景

これらは、いずれも造り方が粗く、精巧な石製品とは異なって、一見して模造品とわかるものばかりである。

石製模造品は、祭祀に用いられたといわれており、当遺跡より出土のものも、宗教的意味を持っていると判断される。具体的な祭祀の内容・形態や、祭祀のどのような場面で

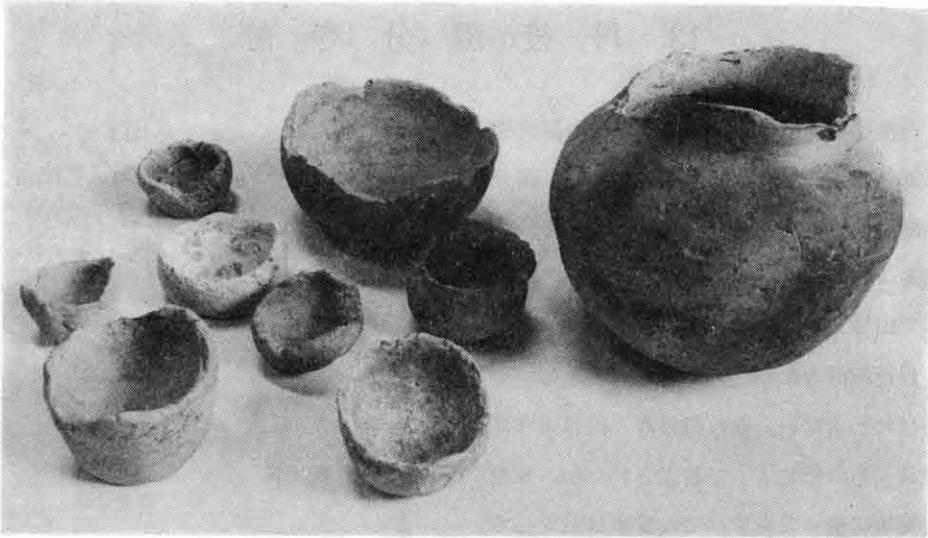
石製模造品が用いられたかに関しては、詳しくは知りえない。しかし、古代の祭りの場で、このような模造品を用いて、何らかの儀礼が行われた以上、古代祭祀のあり方を推定する上で、石製模造品が重要な資料となるのはいうまでもあるまい。

石製模造品がいつ頃ののものかについては、これまでの研究により古墳時代に入ってからであることが明らかになっている。4世紀後半頃より出現しはじめ、5世紀になると大量にできるようになる。石製模造品以外の遺物は、土器が多く、小型土器が大部分を占めている。大宮売神社出土の小形土器は、大きく二種類に分けられる。1つは、小形丸底埴とよばれるもので、口部が開き、底が丸くなっている。器高は、6~9cm程度で、比較的小さく、大形の丸底弥生式土器との関連が推定されている。こちらの方は、量が少ないが、もう1つの、いわゆる小形手捏粗造土器の方は、大量に出土している。形状は、埴・鉢・盤・高杯と多種に及び、器高も3~6cmとかなり小さい。中には、簡単に指を突っこんで形を整えたにすぎないものまでである。時代は、石製模造品が造られた頃と同時期か、それ以降のもので、これらも祭祀に用いられたといわれている。

また、小形土器とともに弥生から古墳時代にかけての土器も出土している。ただ、弥生時代に祭祀が行われていたかどうかは不明であるが、古墳時代に入ると、確実に行われていたといえそうである。

古墳時代以降の他の遺物は少ないが、平安時代頃の遺物とみられる糸切り底の土師皿も出土しており、何らかの宗教的伝統が連綿と続いていたことを傍証している。上に述べたように、大宮売神社そのものは、古代以来、その地を移動していないことは確実である。従って、古墳時代以来の祭祀の伝統は消えることなく、7世紀後半になり、神社が形成されていったと考えられる。

大宮売神社は、『延喜式』には名神大社とあり、祈年祭（毎年2月に、その年の豊作を



第3図 大宮壳神社境内出土土器

祈願する祭)に、特別の奉幣を受けている。中世(鎌倉～室町時代 12～16世紀)には、丹後国二ノ宮として栄え、明治には国幣中社となった。戦後、官幣・国幣の制度はなくなったが、今、神社の所在する大宮町の名称は、ここからきていることはいうまでもない。

このように、大宮壳神社は、古墳時代以来、一貫してその祭祀が続けられてきた(むろん、祭祀の内容は、時代により変容しているが)神社の一つである。

(土橋 誠)

参考文献

- 梅原末治「大宮壳神社」(『京都府史跡勝地調査会報告』第5冊 京都府) 1923
『続京都の社寺文化』(財)京都府文化財保護基金 1972
大場磐雄『祭祀遺跡—神道考古学の基礎的研究—』角川書店 1970

13. 丹後国分寺跡

丹後国分寺跡は、宮津市字国分の海拔約21mの高台に位置し、南面している。国分寺跡からは特別名勝天橋立、阿蘇海を一望することができる。現在の国分寺は、真言宗で山号を護国山という。

丹後国分寺の創建については、詳しいことはわからない。他の国分寺と同じように聖武天皇の詔によって着工されたが、8世紀後半に至ってもすべての堂宇は完成していなかったらしく、宝亀年間(770~780)に造寺料が出挙に充てられたりしている。

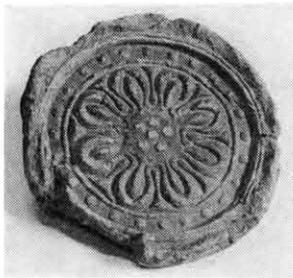
『延喜式』段階では国分寺料2万束がその維持費として充てられていることがわかる。また鎌倉時代には丹後国石河荘に30町歩ほどの所領があったと記録されている。しかし、律令国家の力が衰えるに従い、丹後国分寺も国家の保護を失ってしだいに衰退していったものと思われる。

しかし、後醍醐天皇の代の嘉暦2(1327)年再建にとりかかれ、一時中断したものの、建武元(1334)年、金堂・僧堂・僧房・庫裡などが再建された。ところが、建武新政の失敗とともに保護者を失い再び没落に至る。また天文11(1542)年6月には、兵火にかかり全焼したが、のち寺地を古代以来の場所から現在の北の丘に移し、再建されることとなった。

現在の国分寺の南には、史跡公園化された礎石群がある。16個と33個の二群の礎石群であるが、前者は三重塔、後者は金堂にあたと考えられている。現在、これらの礎石群は



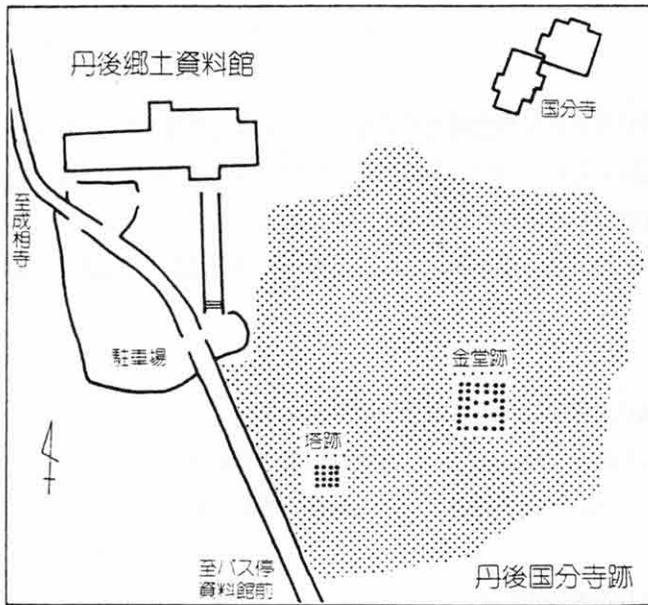
第1図 丹後国分寺跡位置図(1/50,000)



第2図 丹後国分寺跡出土瓦・同拓影



第3図 普賢寺跡出土瓦拓影



第4図 丹後国分寺跡周辺図

建武再建当時のものといわれている。それは、33個の礎石群が「建武再興記」に書かれた再建金堂の5間四面という大きさに一致することからでもある。

なお、国分寺跡出土の軒丸瓦は、単弁8葉蓮華文を内区とし、中房は八角形を呈している。これと同系統の瓦は、田辺町普賢寺跡および山陰地方の国分寺

跡からも出土している。また、先年府立丹後郷土資料館敷地の一部（国分寺隣接地）が試掘調査された際、弥生土器や奈良時代～中世の土器の破片が出土している。遺構は検出されていないが、この国分寺の周辺地区は、弥生時代から利用されていたことを窺うことができる。

(久保田健士)

参考文献

- 魚澄惣五郎「丹後国分僧寺」(『京都市史跡勝地調査会報告』第6冊 京都市) 1925
- 『続京都の社寺文化』(財)京都市文化財保護基金 1972
- 樋口隆康編『京都考古学散歩』学生社 1976
- 『丹後郷土資料館報』創刊号 京都市立丹後郷土資料館 1980

長岡京跡調査だより

当調査研究センターの長岡整理事務所を会場に毎月行っている長岡京連絡協議会も、1年が経過した。今年度も、長岡京での調査は、多数見込まれている。さて、2年目にはいった長岡京連絡協議会、4月は27日に、5月は25日に、6月は22日にそれぞれ行い、その中で下記の表の調査が報告された。この中から、主だったものについて以下に簡単に説明したい。

- 宮内第134次 (3) (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター
表土直下で地山となり、近現代の攪乱域以外は検出されなかった。また、この調査地では、長岡宮の整地土層も確認されなかった。
- 宮内第135次 (4) 向日市教育委員会
長岡宮の2間×5間の東西棟の掘立柱建物跡を検出した宮内第

調査回数	調査次数	地区名	調査地	調査機関	調査期間
1	宮内第131次	7AN12D	向日市寺戸町中ノ段12-5	向日市教委	58. 4.20～ 4.30
2	宮内第132次	7AN13C	向日市寺戸町中ノ段3-3	〃	5.30～ 5.31 6.18～ 6.19
3	宮内第134次	7AN15E-8	向日市上植野町南開15-1	(財)京都府埋	6.6～ 6.20
4	宮内第135次	7AN7G	向日市寺戸町東野辺	向日市教委	6.17～
5	右京第127次	7ANOSG STE-4	長岡京市下海印寺西明寺他	(財)京都府埋	3.17～ 6.8
6	右京第128次	7ANNHR-2	長岡京市友岡1丁目311-1	(財)長岡京市埋	3.22～ 5.19
7	右京第129次	7ANNNS-2	長岡京市友岡4丁目14-1	〃	4.18～ 5.17
8	右京第130次	7ANKNC	長岡京市天神2丁目26-1	〃	4.20～ 5.21
9	右京第131次	7ANIHY-2	長岡京市今里彦林8-1, 18-40	〃	5.26～ 6.7
10	右京第132次	7ANOYM	長岡京市下海印寺横山46	〃	5.26～ 6.29
11	右京第133次	7ANSMD	大山崎町円明寺松田	大山崎町教委	6.2～
12	右京第134次	7ANPST	長岡京市奥海印寺新度畑	(財)長岡京市埋	6.8～ 6.24
13	右京第135次	7ANMMK-2	長岡京市神足3丁目	〃	6.15～
14	右京第136次	7ANOOD	長岡京市下海印寺下内田	〃	6.15～ 6.28
15	左京第93次	7ANXNR XHD	京都市伏見区羽東師菱川町	(財)京都市埋	～ 4.23
16	左京第100次	7ANEHD	向日市鶏冠井町七反田14-1	向日市教委	5.2～ 5.27 6.17～

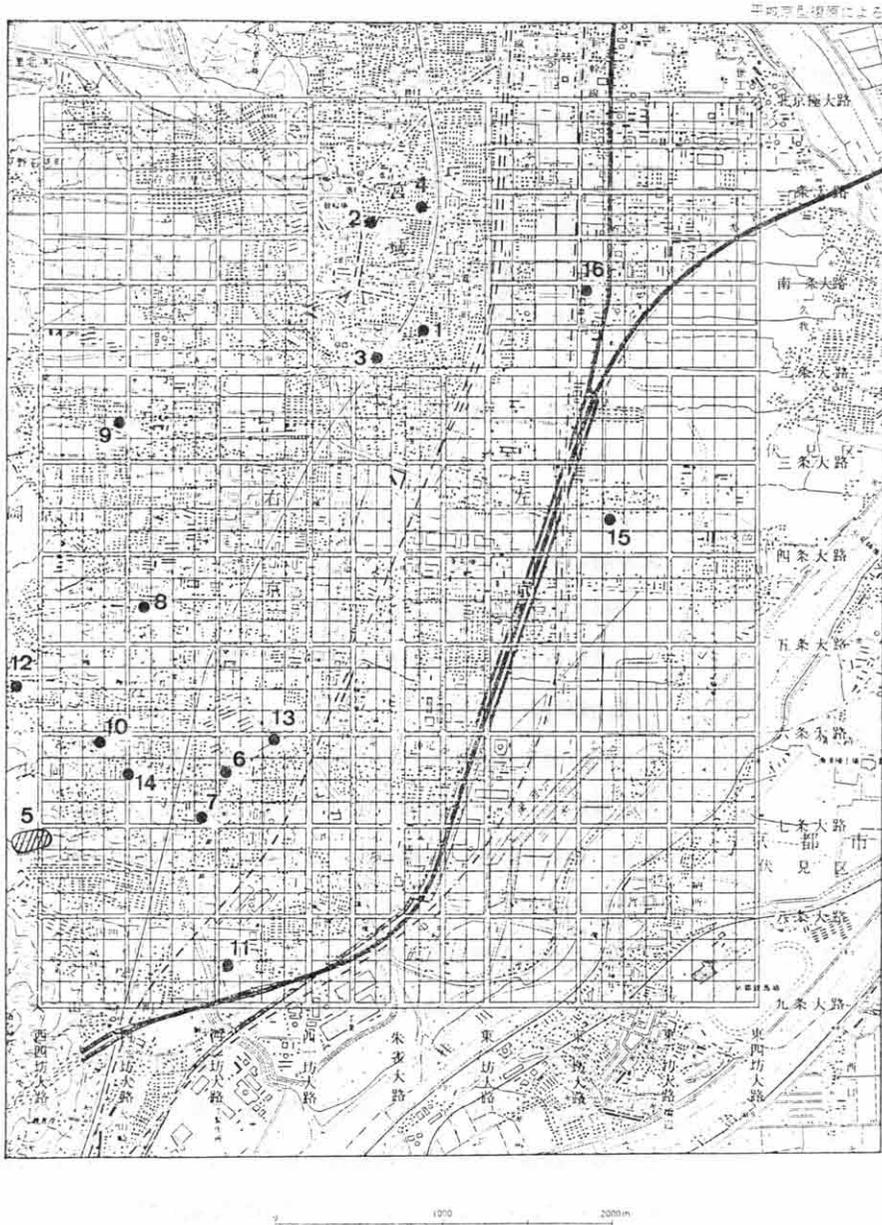
長岡京跡調査地一覧表 (58. 6.30現在)

123次調査地の隣接地である。今回の調査でも、南北方向の柱穴列を検出した。

右京第127次 (5)

(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター

長岡京条坊復原図



- 調査対象地内に、22本のトレンチを入れたが、遺構は検出して
いない。未買収地を残し調査は終了し、現在一時中断している。
- 右京第128次 (6) (財)長岡京市埋蔵文化財センター
旧河道と井戸等を検出した。井戸は大部分近世以降のものであ
るが、1基は長岡京期前後のもので、井戸内から土師器や石鈔の
鈦尾が出土した。
- 右京第129次 (7) (財)長岡京市埋蔵文化財センター
友岡麩寺推定地の一角で、土塚・柱穴や地形に沿った溝等を検
出した。瓦が多数出土するとともに、須恵器の多口瓶が出土した。
- 右京第130次 (8) (財)長岡京市埋蔵文化財センター
上下2面の遺構面を確認し、上層では炭の詰まった焼土塚を検
出し、下層では一辺約3mの方形の溝をめぐる遺構を検出し
た。
下層の方形の溝をめぐる遺構は、溝中にかたまって土師器
皿が遺棄されていたり、あるいは凝灰岩製の宝篋印塔の相輪が出
土したことなどから、供養塔と考えられている。時期は平安時代
末期頃のものである。
- 右京第131次 (9) (財)長岡京市埋蔵文化財センター
古墳時代末期や平安時代中期の溝や土塚等を検出した。
- 右京第133次 (11) 大山崎町教育委員会
今回の調査は弥生時代の住居跡等を検出した右京第33次調査地
の近接地で、同じ大山崎中学(旧第2乙訓中学)の敷地内である。
現在、掘り下げ中で遺構面までは達していないが、古式土師器や
弥生土器が出土している。
- 右京第135次 (13) (財)長岡京市埋蔵文化財センター
調査地は、長岡京跡の六条大路と宅地部分の右京七条二坊八町
の推定地となっている。この調査では、長岡京期の掘立柱建物
跡や柵列を検出した。北端部は六条大路の推定地であるがそれら
しいものは検出されず、建物跡を検出したことなどから、当調査
地の北側隣接地に想定される右京第102次調査で検出した東西溝
(SD10202)の延長ラインが六条大路の側溝となる可能性が強ま

左京第100次 (16)

ってきた。

向日市教育委員会

東二坊大路東側溝と南一条大路南側溝を検出した。それぞれ幅約1.2~1.5m・深さ0.2~0.3mを測る。東二坊大路東側溝は、南一条大路を横切って流れている。

また、これらの他、弥生時代の遺構も検出されている。

(山口 博)

福知山市大道寺経塚出土紙本経の保存修理とその問題点

- 注1 竹原一彦「豊富谷丘陵遺跡(大道寺跡)発掘調査概要」(『京都府埋蔵文化財情報』第2号(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター)1981.12
- 注2 長元4年(1031)の年紀のある上東門院彰子の「女院御願文案」(『門葉記』巻79所収)に詳しい。
- 注3 京都市の聖護院の智証大師坐像、奈良市の興福寺の薬師如来坐像の像内納入経巻の容器に竹製経筒が用いられている。

財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター
組織および職員一覧 (58.6.30現在)

理事長	福山敏男 (京都府文化財保護審議会委員) (元京都大学教授)	事務局長	栗栖幸雄
副理事長	樋口隆康 (京都府文化財保護審議会委員) (元京都大学文学部教授)	総務課	課長 白塚 弘 会計主任 安田正人 主事 塔下麗子 古澤俊彦 嘱託 中西 修
理事	栗栖幸雄 (常務理事・事務局長) 岸 俊男 (京都大学文学部教授) 藤井 学 (京都府立大学文学部教授) 川上 貢 (京都府文化財保護審議会委員) (元京都大学工学部教授) 足利健亮 (京都大学教養部助教授) 中沢圭二 (京都府文化財保護審議会委員) (京都大学理学部教授) 佐原 真 (奈良国立文化財研究所 埋蔵文化財センター研究指導部長) 原口正三 (大阪府立島上高等学校教諭) 藤田价浩 (財団法人京都古文化保存協会) 理事長 井上裕雄 (京都府文化芸術室長) 城戸秀夫 (京都府教育庁指導部長) 東条 寿 (京都府教育庁指導部 文化財保護課長)	調査課	課長 堤 圭三郎 課長補佐 杉原和雄 企画資料担当 調査員 山口 博 田中 彰 〃 久保田健士 土橋 誠 嘱託 長関和男 第1担当 主任調査員 辻本和美 調査員 伊野近富 小山雅人 〃 岩松 保 藤原敏晃 第2担当 主任調査員 水谷寿克 調査員 石井清司 村尾政人 〃 引原茂治 岡崎研一 〃 田代 弘 森下 衛 第3担当 主任調査員 長谷川 達 調査員 増田孝彦 石尾政信 〃 竹井治雄 黒坪一樹 〃 山下 正 第4担当 主任調査員 松井忠春 調査員 竹原一彦 戸原和人 〃 小池 寛
監事	岡田忠司 (京都府出納局長) 加藤一治 (京都府監査委員事務局長)		

センターの動向 (58.4~6)

1. できごと(58.4~58.6)

- 4. 6~14 新規採用職員研修実施
- 4.25 青野西遺跡(綾部市)発掘調査開始
- 4.27 長岡京連絡協議会開催
- 5. 9 職員を対象として労働衛生安全研修会を開催
- 5.17 祝園地区遺跡(精華町)発掘調査関係者説明会実施
- 5.17 北金岐遺跡(亀岡市)発掘調査開始
木津川河床遺跡(八幡市)発掘調査開始
- 5.20 長岡京跡右京第127次(長岡京市・大山崎町)発掘調査関係者説明会実施
- 5.23 洞楽寺遺跡(福知山市)発掘調査開始~6.30
- 5.25 篠窠跡群(亀岡市)発掘調査開始
- 5.25 長岡京連絡協議会開催
- 5.30 千代川遺跡第3次(亀岡市)発掘調査開始
- 6. 6 長岡宮跡第134次(向日市)発掘調査開始~6.20
- 6. 9~10 第4回全国埋蔵文化財法人連絡協議会総会一於福岡県北九州市一出席(栗栖事務局長,古沢主事,田中調査員)
- 6.13 昭和57年度会計監査実施さる。
- 6.20 千代川遺跡第4次(亀岡市)発掘調査開始
- 6.21 第8回全国環境整備担当者会議一於京都堀川会館一出席(栗栖事務局長,堤調査課長,杉原課長補佐,山口調査員)

- 6.22 長岡京連絡協議会開催
- 6.30 第7回役員会及び理事会開催一於向日市市民会館一福山敏男理事長,樋口隆康副理事長,岸俊男,藤井学,川上貢,足利健亮,中沢圭二,佐原真,原口正三,藤田价浩,東条寿各理事,栗栖幸雄常務理事出席

2. 普及啓発事業

- 5.21 第14回研修会一於京都社会福祉会館一開催(発表者及び題名)長谷川達「伏見城跡」,土橋誠「亀山城跡」,竹原一彦「中山城跡」,吉岡博之「田辺城跡」,鷹野一郎「口駒ヶ谷遺跡」,参加者57名
- 6.24 第15回研修会一於京都社会福祉会館一開催(発表者及び題名)堤圭三郎「財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センターの業務について」,杉原和雄「昭和58年度発掘調査計画について」,小池久「国庫補助事業の事務手続きについて」,中谷雅治「国庫補助事業の現状」,参加者80名
- 6.30 『京都府埋蔵文化財情報』第8号刊行

3. 人事異動

- 4. 1 森下衛(調査課調査員)京都府教育委員会から派遣さる。
- 4.18 杉原和雄(調査課課長補佐兼主任調査員)京都府教育委員会から派遣さる。
- 4.18 前尾有人氏監事を解嘱さる。
- 4.19 岡田忠司氏監事を委嘱さる。

受贈図書一覧 (58. 3~5)

(財)岩手県埋蔵文化財センター	東北縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告書Ⅸ, 埋もれていた祖先の生活
千葉市遺跡調査会	本郷向, 定原遺跡
清瀬市野畑野塩遺跡発掘調査会	清瀬市野畑野塩遺跡発掘調査報告書
中台三丁目南の丘遺跡調査会	中台三丁目南の丘遺跡発掘調査報告書
府中市遺跡調査会	清水が丘遺跡発掘調査概報Ⅰ
(財)東京都埋蔵文化財センター	多摩ニュータウン遺跡—昭和56年度—(第5分冊), 同(第6分冊), 多摩ニュータウン遺跡—No. 513 遺跡Ⅰ—
(財)愛知県教育サービスセンター	環状2号線関係埋蔵文化財発掘調査年報Ⅰ
(財)東大阪市文化財協会 埋蔵文化財天理教調査団	鬼虎川, 鬼虎川の金属器関係遺物, 若江遺跡発掘調査報告書Ⅰ 布留遺跡杣之内木堂方地区発掘調査概要, 出土木器の樹種と木取りⅠ・Ⅱ, 出土果実および種子の同定Ⅰ, ウテビ山2号墳発掘調査報告, 布留遺跡布留(西小路)地区中世の遺跡と出土瓦器, 奈良県天理市杣之内火葬墓, 布留遺跡出土の初期須恵器と韓式系土師器
(財)鳥取県教育文化財団	円護寺遺跡群, 長瀬高浜遺跡発掘調査報告書Ⅴ
(財)広島県埋蔵文化財調査センター	年報 ひろしまの遺跡
(財)愛媛県埋蔵文化財調査センター	瀬戸内海大橋関連遺跡埋蔵文化財調査報告書Ⅲ, 同Ⅳ, 愛媛県総合運動公園(動物園)整備計画関連埋蔵文化財発掘調査報告書(Ⅰ)
福岡市埋蔵文化財センター	福岡市埋蔵文化財センター年報 第1号
宮内庁書陵部	書陵部紀要 第34号(抜刷)
福島県教育委員会	東北新幹線関連遺跡発掘調査報告Ⅵ
金沢市教育委員会	金沢市二口六丁遺跡, 金沢市畝田・無量寺遺跡, 金沢市新保本町チカモリ遺跡—遺構編一, 金沢市二口町遺跡, 金沢市無量寺遺跡, 昭和57年度金沢市埋蔵文化財調査年報
長野市教育委員会	浅川扇状地遺跡迎田遺跡・川田条里的遺構・石川条里的遺構
静岡市教育委員会	駿河牧ヶ谷古墳
三重県教育委員会	三重県埋蔵文化財年報12, 発掘された中世の三重
柏原市教育委員会	高井田横穴古墳群試掘調査概要報告書, 片山廃寺塔跡発掘調査概報2-Ⅰ, 大県遺跡
芦屋市教育委員会	三条岡山遺跡
加古川市教育委員会	札馬古窯跡群発掘調査報告書

天理市教育委員会	天理市前栽町九ノ坪・シマダ遺跡発掘調査概報, 天理市守目堂町アゼクラ遺跡発掘調査報告
広島市教育委員会	文化財のしおり, 不動院, 広島付近の主要交通路の変遷, 広島市の文化財—記念物編—
北見市立北見郷土博物館	開成 4 遺跡
山形県立博物館	山形県立博物館報 昭和57年度
日立市郷土博物館	日立市郷土博物館紀要 第3号
市立市川考古博物館	下総国分尼寺跡 I 昭和57年度調査報告
国立歴史民俗博物館	国立歴史民俗博物館研究報告 第2集
出光美術館	出光美術館 館報第41号, 同第42号
大田区立郷土博物館	特別展 東洋を奏でる民族楽器
市立岡谷美術考古館	上向遺跡
静岡市立登呂博物館	特別展 静岡の鋳
磐田市立郷土館	新豊院山墳墓群D地点調査報告書, 特別展 京見塚遺跡展
愛知県陶磁資料館	館報 第1号, 愛知県陶磁資料館研究紀要1, 企画展 萬古焼展
瀬戸市歴史民俗資料館	南山第2号窯(大六第1号窯)発掘調査報告, 赤津長根第1・2号窯発掘調査概要, 穴田第1・2号窯発掘調査概要, 大草第6号窯発掘調査報告, 瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要I, 瀬戸の石造物
豊田市郷土資料館	豊田市郷土資料館収藏品図録Ⅲ
愛知県清洲貝殻山貝塚資料館	愛知県清洲町廻間遺跡
名古屋市博物館	名古屋市博物館研究紀要 第6巻
豊橋市美術博物館	浪ノ上第1号墳調査概報
奈良国立文化財研究所飛鳥資料館	渡来人の寺—檜隅寺と坂田寺—
九州歴史資料館	九州歴史資料館年報 昭和56年度, 九州歴史資料館研究論集8, 大宰府史跡昭和57年度発掘調査概報, 九州歴史資料館収蔵資料目録2
博物館等建設推進会議	文明のクロスロード MUSEUM KYUSHU 第7号, 同第8号, 同第9号
大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館	国東半島の石工1, 豊後国田染荘, 宇佐風土記の丘歴史民俗資料館年報 1981年度
駒沢大学考古学研究室	先史16東京都町田市武蔵岡遺跡—1977・78年度調査—, 先史17同—1979年度調査—, 先史19同—1981年度調査—
早稲田大学考古学会	古代 第73号
早稲田大学図書館	古代 第73号
日本大学史学会	史叢 第30号
東海大学史学会	東海史学 第17号

富山大学人文学部考古学研究室	小矢部市埋藏文化財分布調査概報Ⅱ(1980年度),同Ⅲ(1981年度)
名古屋大学文学部考古学研究室	名古屋大学文学部研究論集 LXXXVI(史学29)考古学抜刷
天理大学博物館学研究室	壺根古墳群
岡山大学文学部考古学研究室	権現谷岩陰遺跡,吉島古墳
山口大学人文学部考古学研究室	松尾遺跡発掘調査概報
九州大学文学部九州文化史研究施設	九州文化史研究所紀要(考古学関係抜刷集)
朝鮮学会	朝鮮学報第104輯,同第105輯,同第106輯
京都府立丹後郷土資料館	智恩寺の文化財から
京都府立山城郷土資料館	山城郷土資料館報 創刊号
京都府立総合資料館	京都府資料所在目録,京都府関係雑誌論文目録, 京都府立総合資料館所蔵逐次刊行物目録
(財)京都市埋藏文化財研究所	京都市域における埋藏文化財の発掘・試掘・立会調査一覧, 平安京左京八条三坊,史料京都の歴史 第2巻 考古
京都大学埋藏文化財研究センター	京都大学構内遺跡調査研究年報 昭和56年度
宇治市教育委員会	宇治市埋藏文化財発掘調査概報 第1集,大鳳寺跡第3次発掘調査概報
福知山市教育委員会	和久寺跡第1次発掘調査概報
八幡市	八幡市誌 第二巻
大江町	大江町誌 通史編上巻
加悦町教育委員会	入谷西A-1号墳発掘調査概報,加悦町の指定文化財
京北町教育委員会	愛宕山古墳発掘調査概報
峰山町教育委員会	七尾遺跡発掘調査報告書,扇谷遺跡発掘調査概要
田辺町教育委員会	南田辺団地内遺跡試掘調査概報
京都学園大学考古学研究会	京都学園大学構内遺跡第3次発掘調査報告
(財)古代学協會	古代文化 第209号,同第291号,同第292号
日本庭園文化協会	庭園文化 第7号
教王護国寺	教王護国寺防災施設工事・発掘調査報告書
丹羽 博	甚目寺町文化財調査報告Ⅰ
安藤 鴻基	古代房総史研究 第1号

—編集後記—

本誌第8号は、昭和58年度最初の一冊です。そこで例によって、冒頭に今年度の当調査研究センターの調査予定と、昨年度の京都府下の主な調査についてまとめました。次に、保存修理の完了した福知山市大道寺経塚出土の紙本経について、その修理の問題点等を京都国立博物館の難波田氏にわかりやすく執筆していただきました。この経巻は、8月に当センターで実施する「第2回小さな展覧会」で展示する予定です。

なお、「府下遺跡紹介」については、今年度は寺院跡等宗教関係遺跡を中心に紹介する予定です。

(編集担当 田中 彰)

京都府埋蔵文化財情報 第8号

昭和58年6月30日

発行 (財) 京都府埋蔵文化財調査研究
センター

〒602 京都市上京区広小路通寺町東入ル
中御霊町424番地

TEL (075)256-0416

印刷 中西印刷株式会社

代表者 中西 亨

〒602 京都市上京区下立売通小川東入

TEL (075)441-3155 (代)